

パリの天使

天使たちは人間の人生を羨んでいる
たとえそれが絶望と希望の繰り返しだとしても

プロローグ

ある冬の朝、私はパリのとある広場を歩いていた。まだ七時過ぎだった。その小さい広場に人気はなかった。黒々とした街路樹の葉は全て落ち、所々に朽ちかけた落ち葉が固まっていた。周囲の風景の何もかもが色を失っている。そして、その広場に地球最後の光のような淡い朝日が白く曖昧に注ぎ込んでいた。仄かに暖かな光の中を、私は自分の影とともに歩いていた。そのとき広場の真ん中に何かが落ちているのが見えた。軽い好奇心に足を動かされながら、私はそこまでゆっくりと歩いていった。落ちていたのは一個の赤いリングだった。辺りを見回したが、もちろんリングの木などあるわけがなかった。パリ中探したって見つからないだろう。のろのろとした動作で、私は地面に落ちたリングを拾った。ひんやりとした感触が指に伝わってくる。それはどこにでもある普通のリングのようだった。アダムのリングでもニュートンのリングでもない、普通のリン

ゴだ。しかし何故こんな場所に落ちていたのだろうか。答えになりそうなものはなにも見当たらなかった。私はそのとき何故か空を見上げた。薄い雲に覆われた、透き通るような淡い藤色の空だった。このリングはどのような物語を経てここへやってきたのだろうか。私には分からない。警察であればリングから指紋を採取するだろうが、私はただ想像するだけだ。その感触と香りをゆっくりと確かめながら。

アデリー又は目が覚めた瞬間、今までいた場所の在り処を見失っていた。ぽっかり空いた身体がベッドの上に浮かんでいるようだった。それなのに身体全体が鉛を詰めたかのように重い。アデリー又は起き上がれず、ベッドの中で縮こまっていた。このまま布団を被つていようが起きようがさほど変わりはないのだと思うと、すでに自分は死んでいられるかもしれないと思った。その感覚に耐えられなくなり、右手を動かして髪を触ってみる。手は動かし髪は頭にしっかりと生えている。墨のように黒い巻き毛が眼の視界に入る。次に陶器のように白い頬を触り、微かに汗を帯びた鼻筋に触れる。

(まだ生きている)

昨日と同じ自分のようだ。しかしこの世界に自分がいることに、アデリー又はいつものように落ち着かない違和感を覚えた。部屋は暗く淀んでいて、曖昧な夢の断片が漂っ

ているかのようだった。そのとき鳥の羽ばたきがアデリーヌの耳に聞こえた。やはりいつもの朝がやってきたのだ。アデリーヌは布団を纏ったまま上半身を起こした。二センチほど開いたカーテンの隙間から淡い光が部屋に差し込み、白い布地の向こうに鳩のシルエットが見えた。アデリーヌはベッドから白く細い足を一本ずつそろそろと出し、ひんやりとした床を踏みしめた。そして白いカーテンに触れた。柔らかく冷たい布の感触と共に、わずかに開いたカーテンの隙間から黄金色に光る埃の渦が見える。アデリーヌはカーテンを開けた。その瞬間、鳩が勢いよくパリの空に飛び出した。

アデリーヌは少し落ち着きを取り戻して、洗面所に行った。顔を洗いながら水の滴る自分の顔を見る。世界中の誰とも似ていない、疎外された表情が白い皮膚の上に貼り付いている。黒い巻き毛は、朝露に濡れた草のように重く額に垂れていた。今日も朝が私にもやってきた。しかし今日で終わりだろう。あの黒い怪物はまだ部屋の隅にい

るのだ。そう思い、アデリーヌは朝食の支度にとりかかった。スーパーで買った安いブリオッシュが残っていたのでそれを袋から取り出す。冷蔵庫を開けると、下の段には傷んだリングが転がっている。アデリーヌは鼻に小さな皺を寄せた。九月にノルマンディーの実家から送られてきたリングだった。すでに傷み出している。上の段の奥には数日前に買ったリ・オ・レが一パックだけ残っていた。それと冷蔵庫の横にずっと置いてある実家で作られたカルヴァドス。それで食料は全てだった。

カフェ・オ・レのためのお湯を菓缶で沸かしながら、数分後にやってくる何かのことを考えた。日は徐々に昇り、台所に暖かな光が差し込んできた。それはいつもと変わらない一日の始まりだったが、アデリーヌにとっては得体の知れない茫漠とした霧のようだった。そのとき誰かが階段を上がってくる音が聞こえた。アデリーヌは目を野ウサギのように丸くして耳を澄ました。ついに何かが来たのだ。アデリーヌは身体を震わせた。それをアデリーヌは「悪魔」と呼んでいた。悪魔は常に具体的な形をして現れ、自分が

本当は人間ではないことを知らせにやつてくる。カフェ・オ・レはあと数分で出来上がるのに、私はそれを飲むことさえできないのだろう。階段を登ってやつてくるのはきつと警察で、私の今までの小さな犯罪を告発しにやつてきたのだと気づく。そんな想像をしているうちに、足音が近づいてきた。もうすぐドアをノックする音が聞こえ、そして野太い声が自分の名を呼ぶのだろうと思った。ドアの前で足音が止まった。アデリーヌは台所に立ったまま息を止めた。ドアの外は沈黙したままだった。しばらく待っているもノックはなかった。よく耳を澄ますと、ゼイゼイという息切れのような低い声が聞こえた。足音はそのまま遠ざかっていった。一つ上の階の老人ベルナルだ。何故かいつもエレベーターを使わず、階段を上って自分のアパートマンへ戻るのだった。エレベーターを信用していないのかもしれない。悪魔ではなかった。アデリーヌは目を見開いたまま鼻から細く息を出した。目を一回強く閉じ、また開けた。それと同時に菓缶が鳴った。辺りに耳を済ませながら、最後となるかもしれない朝食をとった。もう足音は聞こ

えなかった。しかしどこか遠くで何か不穏な音が聞こえ、それはもうすぐ自分に関係することが分かっていた。バイクの排気音、車のクラクション、盗難防止ブザーの音、意味の分からない叫び声。それらも全て自分へふりかかる危険の兆候だった。シャガールのポストカードが貼られた白い壁を見つめたまま、アデリーヌは残りのブリオツシュをちぎって口の中に入れた。黒い怪物はまだ寝室にいるだろう。部屋のどこかに隠れているはずだ。リ・オ・レをスプーンですくって食べ、最後にカフェ・オ・レの残りを飲んだ。そろそろ仕事へ行く時間よ、アデリーヌ。アデリーヌは自分自身にそう言い聞かせた。

緩慢なアール・ヌーヴオー様式のエレベーターに乗りながら、アデリーヌは何かがやっってくるのを感じていた。ここまでは昨日と同じだが、そううまくはいかないだろう。地上がどうなっているのか見当もつかない。どこかの階で私を殺そうと待ち構えている悪魔がボタンを押してエレベーターを停まらせるか、エレベーターから永久に出られないよ

うに細工をするかもしれない。となると、このエレベーターは最後の審判へ向かう死刑台ではないだろうか。上に住む不可解なベルナル老人のように、階段を使つて下りるべきだっただろうか。頭の中でマイルス・デイヴィスの即興音楽が聞こえだし、鼓動と呼応するかのようにシンバルが頭の奥で鳴りだす。不安になったアデリーヌは目を上下左右にせわしなく動かした。しかしエレベーターはどの階にも停まらず、巨大イグアナのげっぶのような音を出して地上階へと無事にたどり着いた。

エレベーターを降りて出口に向かうとき、ちょうど管理人室から出てきたマダムに出くわした。アデリーヌは目を丸くして立ち止まり、全てを見抜いているといったマダムの鷹のような瞳を無言で見つめた。言葉がなかなか出てこなかった。人と出会うといつもそうだった。胃から口まで重い鉛が詰まっているかのように、喉が圧迫されるのだ。唇が震えたが声が出ない。しかし次の瞬間、アデリーヌは甲高い声で、

「ボンジュール、マダム」

と言った。それが自分の口から発せられたことに驚き、その驚きをマダムに悟られはしないかと恐れた。その言葉はかろうじてこの世界につながるための意味のない合言葉だった。

「ボンジュー」

壊れたラジオのようなマダムの声がそれに応えた。そのときエレベーターが背後でのごごとと動き出した。上にいる誰かがボタンを押したらしい。マダムはアデリーヌの後ろのエレベーターを見ながら、

「こいつは十九世紀万博の遺物だね」

と言つて顔を顰め、ゴミ置き場のほうに歩いていった。アデリーヌは何も非難されなかつたことにほっとしたが、エレベーターの不調が自分のせいであることを暗に追及されたような気がしてぶるつとした。ゴミ箱を整理しながらぶつぶつ何かを言うマダムの声が聞こえてきた。アデリーヌは少し早足で共同玄関に向かったが、出口の向こうに何が

待っているかを想像して憂鬱になった。このアパルトマンの前では、きっと今までの私の罪を非難する人々が集まってデモを行っているはずだった。お前は人間ではない！ そう叫ぶ人々の姿が目には浮かんた。マダムだってそのことを知っていてドアを閉めている。さきほど目が合ったときに睨んだのは私に原因があるからだ。しかしもう迷っている暇はなかった。ゴミ整理を終えたマダムがまた戻ってくるかもしれないし、先ほどのエレベーターが私に危害を及ぼす悪魔を乗せて戻ってくるかもしれないのだ。アデリーヌは薄暗い壁についた共同玄関の開錠ボタンを押した。カチンというプラスチックを叩くような音が聞こえた。アデリーヌは共同玄関のドアをゆっくりと開けた。途端に車の音や人々のざわめきが聞こえ、朝のパリの濃密な空気がアデリーヌの全身を包み込んだ。デモ隊はいなかった。しかしまだ安心はできない。そう思い、アデリーヌは小さな鼻で静かに息を吸い込んだ。

パリは昨日と同じだった。人々は当然のように通りを歩き、当然のような顔をして新しい朝を迎えていた。それがアデリーヌには不思議だった。この世界のあらゆるところで人が動き、一日が始まっていることが。教科書に書かれた激動の歴史などは空想の産物であるかのように、毎日が停滞した同じ日の繰り返しのように感じられた。歴史は二度とやってこないものなのに、何故毎日が同じように見えるのだろうか。やはり自分は人間ではないのかもしれない。

退屈な楕円を描くレピュブリック広場を抜けて、アデリーヌはトゥルビゴ大通りを陰鬱な気分ですきだした。歩き方がおかしくないか、誰かが自分を見て笑っていないか。気がなり、足を一步前に出すたびに自分が滑稽な道化になったような気分を味わっていた。この世界にあるまともな人生から締め出されないように、アデリーヌはできる限り他人の仕草を真似て、ただ真っ直ぐに歩いた。メトロに乗れば十五分で行く左岸のオデオンに彼女の職場はあったが、アデリーヌはいつも歩いてきた。彼女はメトロ

に乗ることができなかった。もう何年間も乗っていない。あの中に自分がいたらと思うと、彼女はぞつとした。単に自分の姿を皆がじろりと見ると思うだけで、アデリーヌは捕縛されたような恐怖を感じるのだった。大通りの途中には幾つかのメトロの入り口があった。タンプル駅、アール・ゼ・メテイエ駅、エテイエンヌ・マルセル駅。しかしアデリーヌはそのメトロの入り口には近寄ろうともしなかった。エクツール・ギマールの作った鑄鉄製の入り口は彼女にとって悪魔の口そのものだった。

サン・トウスタツシュ教会の壮麗な姿が鈍い曇り空の下に聳えている。教会前のレ・アール公園では、ホームレスたちがベンチに座って鳩に餌をやっていた。公園を南に抜けてしばらく歩くと、セーヌ河に出た。ポン・ヌフの前でアデリーヌはいつも立ち止まる。ここまで来て家に引き返した経験が何回もあるため、つい恐れをなして足を止めてしまふのだった。この橋を渡らなければ職場へはたどり着けない。最悪の場合は河を渡れず

に引き返し、病氣と偽つて職場に電話をかけることもあった。セーヌ河はそんな彼女の気持ちなど知らずに悠々と流れていた。河に浮かぶシテ島の西端にヴェール・ガラン公園が見え、その先端にある柳の木の下に若い男女が座っているのが小さく見えた。一日の始まりを祝福している散歩の途中なのかもしれない。それは映画のスクリーンのように美しく遠い風景に思えた。アデリーヌは故郷ノルマンディー・カルヴァドス県での高校時代に、一度だけあのような美しい風景の一部になろうと勇気を振り絞ったことがあった。相手は同じクラスの黒髪を額に垂らした優しく美しい青年だった。ロシア文学についてよく知っていて、皆からロシアかぶれと言われていたが、その知性と柔らかな瞳にアデリーヌは心を奪われた。その青年とカーンのカフェで待ち合わせの約束をしたことがあった。しかし彼は約束の時間にやってこなかった。その翌日、アデリーヌは来なかった理由を聞いたが、その青年は友人とビリヤードをしていて遅れてしまったと言っただけだった。彼自身、約束したことさえも忘れていたようだった。デゾレ(ごめん)と

だけ言った彼の顔に宿った優しそうな笑みは、アデリーヌを苦しめた。それ以来、彼女は男性と上手く話すことができなくなった。言葉を出そうにも鉛が口の中に詰め込まれたように声が出なくなるのだった。その鉛の表面には「お前は決して幸せになれない」という呪文が刻み込まれているように思えてならなかった。愛する人と不安のない朝を迎えられたらどんな気持ちができるのだろう。しかしアデリーヌにはそのような人はいなかったし、これから先にも永遠にできないのだと思った。

ようやく、アデリーヌは橋を渡り始めた。橋の中央、ヴェール・ガラン公園の入り口に立つアンリ四世像が見えてくる。セーヌ河中央にあるシテ島を抜けて橋を渡りきれば、左岸に着く。そのことだけを考えて石の橋を歩いた。橋のところどころにある半円形の休憩所にはゴミが落ちていた。アンモニアの匂いも漂ってくる。ホームレスがここをトイレ代わりにするせいだった。恋人たちは鼻をつままなければ、ここに座って愛を語ることはできない。橋の中央にあるシテ島までやってくると少し鼓動が収まった。煉瓦造

りの館の前を通り過ぎる瞬間、館の間にある小路の向こうにドフィーヌ広場が微かに見えた。しかし、あの広場に入ったことはなかった。アデリーヌにとつてその広場はヴェール・ガラン公園と同じく映画のスクリーンの中にしか存在しなかった。きっと私はスクリーンの前から動けない永遠の観客なのだ。そう思い、アデリーヌは早足で橋を渡りきった。

左岸へ入ったアデリーヌはドフィーヌ通りを歩いた。狭い路地の両側には小さなギャラリーがたくさん並んでいる。サンジェルマンの画廊街だった。ここを通るときは少しだけ胸が躍る。絵や写真は文学と同じく、アデリーヌに危害を加えてこない。だから彼女はギャラリーや書店の多いサン・ジェルマンやオデオンの地区が好きだった。落ち着いた人々が多かったし、男の人は知的であった。それでも前をしっかりと向いて歩くことは稀で、ほとんどの場合俯いて歩き、ギャラリーのショーウィンドウが見えるとちらりと

顔を上げてそこに飾られた絵や写真に目をやる程度だった。しかも全ては自分には関係のないところで美しいのだという、悲しい感情がよぎることがほとんどだった。ショーウィンドウに自分の顔が映ると、そこに自分が存在していることに気づいて驚くことさえあった。

観光客の多いビュシ通りを抜けてサン・ジェルマン大通りに出た。横断歩道の前で信号が青になるのを待ちながら、アデリーヌはまた不安になり始めた。めまぐるしく走り抜ける車や会話をしながら歩く人々がアデリーヌの周りを支配していた。多くの家族や男女の群れがサン・ジェルマン大通りをまつすぐに歩いてきた。これだけ多くの人が今生きていることにアデリーヌは戸惑い、いつもながら圧倒された。彼らは一体どんな偶然によって一緒になり、今ここにいるのだろうか。通りに並ぶ高級ブティックは開店の準備を始めていた。信号は青に変わりまた赤になり、全ては通常通りに動いていた。アデリーヌだけが横断歩道の前で立ち止まったまま硬直していた。通りの向こうにオ

デオン駅のメトロの入り口が見えた。その周りには多くの人が待ち合わせのために集まり、すぐ近くにクレープ屋の屋台が出ていた。学生らしき若者が数人固まって立ち話をしている。駅前にある映画館の入り口の上には今公開中のハリウッド映画の看板が掲げられていた。映画館にはもう何年も行っていない。もともと映画は好きだった。しかしスクリーンの幕が閉まったあと、高揚感に入り混じってある種の悲しさがつきまとうようになった。上映後に席を立てどこへ行けばよいのか分からず、それが原因で映画館からは次第に足が遠のいていった。もしくは単にメトロと同じ理由かもしれない。目の前のサン・ジェルマン大通りをいくつも車が走り去っていった。ただ向こう側の景色を遮るために、それらの車が存在しているかのようにだった。途端に目の前の景色が晴れる。信号が再び青になっていた。アデリーヌは凍った池の水面を歩くかのように、そつと足を差し出した。

オデオン通りへ入ると、急に辺りは静かになった。職場はもう近かった。通りの突き

当たりにあるオデオン座を見ながら小路へと入る。時計を見ると十時四分前だった。胸の鼓動が大通りの中央に出してしまった猫のように動揺していた。ようやくアデリー又は職場の前にやってきた。いつものように、古書店のガレージが半分開いていた。小さなショーウィンドウには幾つもの革装丁の古書が展示されていた。アデリーヌが好きだった十九世紀フランスの挿絵本が飾られている。中に店主のセルジュがいるはずだった。奥の椅子に座りながらノートパソコンを前に四苦八苦している様子が目に浮かぶ。最近古書の外観をデジカメ写真にとって、それをホームページに載せるようになった。アデリーヌがその担当だった。バザーヌ、シャグラン、ヴォー、マカロン、と革装本の種類を口にしながらい録を書いていくセルジュの声が聞こえてくるようだった。しかしアデリーヌは立ち止まらずに職場の前を通り過ぎ、通りをまっすぐ南へ向かった。

リュクサンブル公園は初秋の光に満ちていた。リュクサンブル宮殿の前の噴水で

は子供たちがレンタルの小型ヨットを浮かべて遊んでいる。噴水の端に日本人観光客と思われる女性二人が並んで座っていた。二人はまるで小学校の頃の友達同士のような親密的な距離でくっついており、それでいてお互いに目は合わせないという奇妙な関係を維持したまま静かな微笑を浮かべて会話をしていた。その横では椅子を斜めに向かい合わせた女性二人が、手振りを交えて何かを話し合っており、噴水の前を老夫婦がゆつくりと通り過ぎていった。アデリーヌは鑄鉄製の椅子に腰掛けてそれらの光景を眺めた。すでに十時十五分だった。本当ならあの古書店で働いている時間だ。しかしアデリーヌがもうそこへ行くことはなかった。彼女は一ヶ月前に解雇されたのだった。彼女は人前で喋れなかったし欠勤が多かったため、店主からもう来なくていいと言われた。だから彼女は今失業中だった。それでもアデリーヌは、かつての職場の前を毎日通り過ぎ、そしてリュクサンブール公園までやって来ずにはいらなかった。これが唯一アデリーヌと世界を結び付けておくための「儀式」だった。仕事の休憩時間に来ていた

この公園で光を浴びている限り、昔と何も変わっていない気がした。自分もパリの住人の一人であると感じることができた。働いているときは同じ生活が苦しくつらかったが、いざ仕事がなくになると、その無限に広がる自由に憧れと恐ろしさの両方を感じた。その先には得体の知れない怪物が待ち受けていた。公園に降り注ぐ光がアデリーヌの身体をゆつくりと温め始めた。ちよつと重心を後ろに下げれば倒れてしまう不安定な椅子に座りながら、アデリーヌは目を閉じる。そして、私にできる仕事はこの世にあるのだろうかと考えた。いつからこのような恐怖を感じるようになってしまったのだろうか。小さい頃世界は狭く平和だった。リング畑と木組みの家が並ぶノルマンディーの小さな町が世界の全てだった。高校生になってカーンまで通学するようになると、世界は急激に広がり続け、その向こうにはパリという素晴らしい世界があると思うようになった。光の都パリへ行けば、輝かしい人生があり、自分が何か立派なものになれるのではないかとぼんやり想像したりもした。しかしパリに出て美術学校に入ると、世界は狭

くもなく広くもないことが分かった。素晴らしい人生などもと存在さえしなかった。皆、小さなことに苛立ち無駄に移動して時間を費やし、不満をもらしながら徐々に死へ向かっている。それがパリだった。そして今、パリの公園で自分は徐々に死に向かっているのだと思った。アパルトマンの家賃もあと二カ月後には払えなくなるだろう。目を閉じていても瞼の薄い皮膚を通して光は入ってきた。そして時間はアデリーヌの不安とは無関係にゆったりと残酷に進んでいた。近くで子供のはしゃぐ声が聞こえる。

(とりあえず、私はまだパリから追い出されていない)

アデリーヌは瞼の細かな揺れを感じながら自分に言い聞かせた。これで今日一日を乗りきれよう。

(でも私は何のために今この公園にいるの？話す人がいないなら、私はいないも同然じゃないの)

それに答えてくれる人がいたらアデリーヌは救われたに違いない。しかし会話が上手

くできない彼女には友人はいなかった。何かに触れることが恐ろしくてしかたなかった。

レピュブリック広場に戻ったのは夕方の四時頃だった。何も食べていなかった。広場近くのマクドナルドでマガジンラックにある無料の求人雑誌をもらい、近くのパン屋でバターなしのクロワッサンを買った。それから近くにあるロートル・カフェに入った。そこは家の近くにあるアラブ人経営のカフェだった。昔のカフェという名のこの店は、アトリエ風の一軒家を改造したような広い空間が二階まで広がっている。ここでコーヒーを頼むことがアデリーヌにとって唯一の贅沢であった。コーヒーを頼んでいつもの隅の席についた。店内は美しく静かで、芸術家による写真や絵が展示されていた。今月はアフリカ男性の裸体を写したモノクロ写真だった。席の横の窓枠には小説が数冊積んである。一番上に置かれているのは、パトリック・モディアノの新作だった。小説を数行読んだとこ

ろで若いアラブ人の店主がコーヒーを持ってきた。アデリーヌは目を伏せたままメルシと言った。二人のアラブ人の男客がこちらを見ているのが分かった。アデリーヌはその鋭い瞳に気づかないふりをしてコーヒーを一口飲んだ。それから店主に見つからないようにパン屋で買ったクロワッサンを急いで食べ、求人情報誌を一枚一枚捲った。いつものように、たくさんの求人情報が載っている。しかしそれらを見ても、全ての仕事が自分の能力を否定するために書かれているようにしか見えなかった。スーパーのレジ係。お前はレジも打てずに要領が悪いから失業中なのだと言ってくる。銀行の受付、パン屋の店員、ハンバーガーショップの調理補助、ベビーシッター。目に入ってくる求人情報は全てアデリーヌを間接的に糾弾していた。結局のところ全ての求人情報は告発文書で、自分をこの世界から追放するためにあるのだと思った。探せば探すほど、自分のできる仕事など一つもないことに気づき、世界がさらに狭く窮屈なものになっていった。

カフェを出ると、外は夕方の薄闇に染まっていた。スーパーで買い物をしてからアパルトマンに戻り、管理人室の横にある古ぼけた集合ポストを恐る恐る開けた。中には数枚の封筒があり、それを見ただけでアデリー又はまた怖くなった。ついに自分を糾弾する誰かからの手紙が来たのだろう。不必要な自分をパリから追放するための公式文書だ。それか何か気づかぬうちに自分が人の持ち物を壊していて、その損害賠償を求める通知書、もしくはは市からの税金未払いの督促状、それとも実家からの何か具合の悪い手紙だろうか。アデリー又は急いでそれらの封筒の束を取り出した。息を止めたまま一つ一つ見ていく。銀行からの新サービスのお知らせのダイレクトメールに、デパートからの冬のバーゲンのお知らせ、そして近くにオープンした日本料理レストラン(トヨトミ)のチラシ(コーラと寿しセットで十ユーロ)だった。アデリー又はほっとして辺りを見回した。これらの郵便物は自分だけのために作られたものではない。不特定多

数の人間が不特定多数の人間へ送りつけるために作った意味のない印刷物だった。自分がここにすることは誰にも非難されていない。今のところは。管理人室の窓には明かりがついていた。ラジオの骨董品のようなマダムが出てこないうちにアデリー又はその場を立ち去り、素早くエレベーターに乗った。巨大イグアナの口が開き、アデリー又は今日の終わりへと飲み込んだ。

また夜がやってきた。アデリー又は冷え込んだアパートマンの中で電気もつけずに座っていた。みんなその日に受け取った悲しみをどこに捨てているのだろう。自分だけが知らないカラクリ、もしくは悲しみを捨てられるゴミ箱がパリのどこかにあるのかもしれない。自分だけが街で拾ってしまった悲しみや孤独をアパートマンまで持ち帰りしまいこんでいるのではないかしら。疑問は解決しそうになかった。それから電気をつけて食事にとりかかった。スーパーで買った冷凍野菜をフライパンで炒めて。パンと一緒に食べ、

水を少し飲んだ。今日もパリのどこかのレストランで人々が笑いながらワインを飲み、いくつかのギャラリーではヴェルニサージユ(オープニングパーティー)が開かれているのだろう。芸術作品の前で会話を楽しみ、食事を分かち合い、そして愛する人のもとへ帰っていくのだ。そんな平凡で幸せな人々の顔をアデリー又は想像してみた。しかしその中に自分が加わっている姿は到底想像できなかつた。もしかしたらどこかで私を待っている人がいるのではないか。私はその機会を毎日決まった道を俯いて歩き、アパルトマンの部屋で隠れたまま見過ごしてしまっているのではないか。しかし考えたところで答はいつも決まっていた。

「私はパリで独り」

声に出すと、それはつまりらぬ演劇のありふれたセリフのように思えた。その感情自体が演劇じみていた。この世界が演劇のように嘘の世界だったらどんなにいいだろう。そうすればいつかは幕が閉じ、舞台から降りて今までの孤独も全て嘘であったことが分

かるのに。そして本当の人生がそこから始まるのだ。アデリーヌは立ち上がり、試しに窓を開けてみた。ジュール・フェリー大通りの明かりが下に見え、その下を革のジャンパーを着たアラブ人らしき二人組の男が歩いている。向かいのアパルトマンのいくつかには灯りが見え、小さく人の姿が見えた。通りにいる男たちの姿はとても遠く空恐ろしいものに思えたし、窓に映る人影はひどく演劇じみて見えた。彼らの考えていることや今から行く場所などは、宇宙の果てよりも遠い未知のものだった。そのとき、ベルナール老人の苦しそうな咳払いが天井から聞こえてきた。やはり世界は演劇ではなく、今まさに進行している。窓を閉めるとガラスの震える音が部屋に響き、そのあと急に静かになった。テーブルには食べ終わった食事の皿とワイングラスが置かれている。隣の寝室にはあの黒い怪物が待ち構えている。アデリーヌは怪物に話しかける。あなたはいつまでここに居るの？怪物は答えなかった。

また朝がやってきた。布団の中で、世界はまだ自分とは無関係に続いているのだとアデリー又は思った。自分以外のパリの住人にとって、新しい朝は意味のあるものなのかもしれない。しかしアデリー又にとって、それはただの繰り返しであった。私には物語はない。アデリー又は薄闇に浮かぶ白い天井を見ながらそう思った。寝室は失われてしまった光の残滓のように静かだった。寒い、とアデリー又は感じた。それは何かが決定的に欠けた寒さだった。数分後、彼女はようやくベッドから抜け出て台所に行った。昨日の夜に洗ったお皿が流しに置いてあった。その皿の存在が何故か彼女の気分を重く耐え難いものにさせた。

バスタブに湯を張ってゆつくりと浸かった。湯船から手をだしてその不可解な十本の白い指を見つめる。今の人生が自分自身のものではないと思うときがある。どこかで

本当の人生がひっそりと待機していて、通りの角からひよいと顔を現すのではないだろうか。しかし今までにそんな瞬間に出会ったことはなかった。逆にいつの間にか黒い怪物が部屋に棲み付いてしまった。タオルで手を拭き、浴室の窓辺に置いてあった小説を手にとった。小説からは仄かにリンゴの酸味が漂った。母親が送ってくれたリンゴの木箱を本棚代わりにしているせいだった。その香りは母の感情を含んでいた。母はアデリーヌに対して何かの罪悪を感じているらしかった。カーンでの高校時代からその兆候があり、アデリーヌがパリで引きこもるようになったのも自分のせいだと母は思っていた。毎年収穫の時期に送られてくるリンゴはその償いなのかもしれない。糖分の多い出来損ないのリンゴが九月に、酸味の強いこれまた出来損ないのリンゴが十一月にいつも送られてくる。しかし私はそのリンゴをどう味わったらいいのだろう。リンゴはもうたくさん。そう思いながらアデリーヌは湯船に浸かったまま小説を読み始めた。そのときアデリーヌの前髪から湯の雫が滴り落ちた。ページには数秒前までは予期できなかった

た青白い染みが広がり、ついには最初からあつた事実のように動かなくなつた。

朝の重苦しい気分からようやく抜け出ると、アデリーヌは身支度をした。冷蔵庫の中に転がっているリンゴの中でまだ痛みが少ないものを選び、麻のバッグの中に放り込んだ。そして、いつものように「仕事場の方面」へ行くためにアパルトマンのドアを開けた。エレベーターを待つている間、アデリーヌの心は落ち着かなかつた。この先にあるのが現実の世界であることをまだ認めたくはなく、人に会うまでは夢の中にいるといつも信じていたからだつた。しかしエレベーターを降りて管理人室の横にある共同玄関のドアを開けると、そこには昨日と同じパリがアデリーヌとは無関係にせわしなく動いていた。居心地の悪さと曖昧な不安を抱えたまま、アデリーヌは繰り返しの今日の中をぎこちない足取りで歩き出した。

しかし今日はいつもと何かが違うていた。いつものようにポン・ヌフを渡り始めたとき、

アデリーヌは得体の知れない焦燥感に襲われた。今まさにこの瞬間、知らぬ間に誰かをどこかで待たせているのではないかと思つた。そしてもしかしたら、見殺しにしているのではないかとさえ思つた。それは今までに感じたことのないほど強い感情で、アデリーヌの心をひどく惑わせた。気を落ち着かせるためシテ島へ行く手前で立ち止まり、石の欄干からセーヌの雄大な流れを見やつた。世界は広く恐ろしく、自分は小さく無力だつた。自分にはどうすることもできない。シテ島に建つ豪華なアパルトマンの向こうにノートルダム寺院の尖塔が見えた。観光客を乗せた遊覧船が数ヶ国語のアナウンスを鳴り響かせながら、両替橋のほうへ進んでいった。少し落ち着きを取り戻して、アデリーヌは再び橋の上を歩き出した。煉瓦造りの館の前を通る。二つの館の間の細い路地の向こうに、ドフィーヌ広場の一部が見えた。一瞬、広場の地面に何か見えた気がしたが、アデリーヌはいつものように通り過ぎた。しかし、ほどなくして立ち止まり、また引き返した。こんなことは今までになかつた。彼女はいつもの道を外れて、ドフィー

又広場へ続く小路に足を踏み入れた。

路地を抜けると、そこは驚くほど静かだった。ポン・ヌフの上を走る車の音も聞こえてこない。目の前には豪華な館に囲まれたドフィーヌ広場があった。アデリーヌの視線は広場の地面に先ほど見えたものへと注がれていた。それは人間だった。広場の中央には一人の男が大の字になって倒れていた。他に誰もおらず、街路樹から落ちた木の葉が地面に淡い色彩を与えていた。アデリーヌは一瞬、映画の撮影をしているのではないかと思った。しかし辺りを見回してもカメラや撮影スタッフらしき人影は見えなかった。アデリーヌはどうしていいか分からずに同じ場所を歩き来しながら、今いる場所と館の向こうに見えるポン・ヌフを交互に見た。静かな館に挟まれた小路の向こうには、先ほどまでいたポン・ヌフの通りが細長く切り取られて見えている。その風景の中を、せわしなく歩く人々が姿を現しては消えていった。アデリーヌが毎日のように歩いてきた通勤路だったが、広場から見るとそれは映画のスクリーンのように何か非現実的なも

のに思えた。逆に今いるこの広場こそ、アデリーヌがいる現実だった。その転換があつさりと行われたことにアデリーヌは驚いていた。広場は恐ろしく静かで、動くものは何もなかった。アデリーヌは広場の中へと入り、ゆっくりと男に近づいていった。男は目を半分見開き、空を仰いでいた。アデリーヌはしばらくの間、その男を見つめていた。まだ若くアデリーヌと同じくらい。顔は中国製の青磁のように白く、髪は黒い巻き毛で、それもアデリーヌと同じだった。酔っ払いかと思ったが、表情は驚くほど気持ちよさそう、夜の名残を保持した明け方の空のような美しさがあった。男はまっすぐに空を見つめていた。その瞳は何もかもを突き抜けて空の向こうにある故郷を懐かしんでいるかのようでもあった。そのとき男の視線がアデリーヌを捉えた。

「ボンジュー」

その言葉は数千年前に失われてしまった古代言語のようでもあり、自分に発せられたことが信じられなかった。アデリーヌは何も言えず、ただその男の顔を見ていた。逃

げることでもできなかった。アデリー又は懸命になって言葉を発しようとした。しかしいつものように胃の中に鉛が詰まっていた。声は出そうになかった。ただ唇が震えるだけだった。数秒して、ようやく声が出た。

「ボンジュー、サヴァ(大丈夫ですか)?」

アデリー又はその男に聞こえるくらい小さな声でそう言った。まるで自分自身の心に問いかけるかのように。アデリー又は一瞬、この男が天界から落ちてきた天使ではないかと思った。そのとき男の口元が微かに動いた。

「君は、天使かい？」

心の声を読まれた気がして、アデリー又は驚いた。男は震えながら身体をゆつくりと起こそうとした。アデリー又は咄嗟に男の肩を両手で抑えた。そのとき、アデリー又は今まで感じたことのない重みを感じた。その男の身体から発する微かな汗の匂いとひんやりとした背中との感触は世界の反対側で出会った未知の石のようだった。

「ここはパリで一番静かな場所なんだ」

アデリーヌがあげた熟しすぎたリングを芯まで食べ終えてから男は呟いた。ドフィーヌ広場のベンチに二人は座っていた。二人の身体に日が当たり、秋の冷気が柔らかに温められていた。男はここ数日間何も食べていなかった。その頬はやつれてはいたが、目はいまだこの世界を好奇心という胃袋で満たそうとするかのように輝いていた。同じ島内にノートルダム寺院という観光地があるにも関わらず、この広場に音はなかった。まるで声を出せば世界の人間全てに聞こえるのではないかとアデリーヌは思った。

「ここは何をしていたの？」

「見ていたんだ」

男は屈託のない笑みを浮かべて空を見上げた。男は写真家だった。

「パリに来てもう一年。この街で何を撮ればいいのか分からなくなってしまった。腹を空

かせて地面に倒れば、何か見えてくるんじゃないかって思った。今まで見えてなかった天使とかがね。空っぽだとなんでも吸収できるだろう？ そうしたら、あまりの空腹で、本当に身体が動けなくなってしまうんだ。まるでこのまま地面に音もなく吸い込まれていくかのように、身体が地面から離れなくなった」

冗談なのか本気なのか分からず、アデリーヌはただ黙ってその男の横顔を見ていた。男は立ち上がった。

「でも、君のおかげで動くことができた。リンゴの真実を思い出した」

「ヴェリテ・ドウ・ラ・ポム(リンゴの真実)?」

アデリーヌは意味が分からず、ただ目の前に立つ男の顔を見つめていた。

「僕はガストン。君の名前は？」

アデリーヌは少し目をそらしてアデリーヌと言った。

「君こそ、ここで何をしていたんだい？」

「仕事に行こうとしてたの」

アデリーヌは咄嗟にそう答えた。驚くほど明瞭に、自分の口から嘘が出たことにアデリーヌは驚いた。

「悪いことしたな。もう遅刻じゃないのかい？」

「いいよ」

アデリーヌはそう言って少し笑った。そのときの頬の筋肉の動きは、久し振りのことだったのでぎこちなくなっていた。自分の小さな歯が外気に触れるのを感じた。

「それじゃあ」

アデリーヌは慌ててベンチから立ち上がり、ガストンに背を向けて歩き出した。

「仕事の幸運を祈るよ」

アデリーヌは驚いて振り返った。

「メルシ」

その言葉がこの世界の誰に向かって発せられたのか自分でも分からないうちに、アデリー又は落ち着かぬ気持ちで広場をあとにした。しかし、一体何が起こったというのだろうか。あれほどまでに重かった体が驚くほどに軽やかに回転し、喉の奥まで詰まっていた鉛が一瞬にして消えていくのをアデリー又は感じていた。いや、もともと鉛などなかったのかもしれない。小路を抜けて橋の上に出た瞬間、そこにはいつもの風景があった。ポン・ヌフの上を何台かの車が走り抜け、道の向こうに騎馬姿のアンリ四世が青空とセーヌ河を背景にして立っていた。一点透視図法でポン・ヌフを描いたヘンドリック・モマーズの絵を思い出す。いつもと同じ通勤風景だった。再びポン・ヌフが現実となった。広場はすでに遠いスクリーンの向こうに戻っていた。ただ両手に残ったあの男の背中との接触と彼の発した言葉だけがいつまでもアデリーヌの頭から離れなかった。彼の名前はガストン。アデリーヌはそれを忘れまいとして心の中で呟きながら左岸へ向かった。

いつもの「儀式」を終えて、アデリーヌは家路へとついた。今日も一日が終わろうとしていた。夜のレピュブリック広場はぼやけた騒音と黄色い光に包まれていた。黒々とした街路樹は街灯の光を浴びてさらに黒味を帯び、化粧品店の明るすぎるショーウィンドウがその下で白く輝いている。楕円形のロータリーを車がのろのろと行き交い、メトロの悪魔の口からは人々が次々と吐き出されていた。広場の中央にある薄暗い木立の中では背の高いロシア風の女がタバコを吸って突っ立っている。アデリーヌはむやみに広いこの広場を通るたびに落ち着かない気持ちになった。全てが自分とは無関係に動いていて、見えて目が回りそうになるからだ。しかし今日はいつもと違って、足を止めてその広場の夕闇を眺めていた。ドフィーヌ広場にいたあの男は今頃どこで何をしているのだろうか。私と同じように。パリのどこかで孤独な夜を過ごしているのだろうか。アデリーヌはふと、自分が今見つめている透明で孤独な視線がドフィーヌ広場にいたガストンの目と重なるような錯覚を覚えた。人の記憶の断片のようなあの小さな広場

で、私は本当にガストンと出会ったのだろうか。彼も今どこかで、パリの夜の茫漠とした風景を見つめているのかもしれない。こんな風に他人のことを考えるのは久しぶりのことだった。そして、先ほど自分が笑ったことをアデリー又は思い出していた。自分にもそのような感情が残っていたことが信じられなかった。遠く暗い洞窟の中で冷え込んでいた感情が、微かな熱を帯びて戻ってきたのだろうか。気がつくとき空気は予想以上に冷え込んでいた。アデリー又はジャケットを着た肩をすぼめ、両手を擦り合わせた。息が白い。誰と話すこともなく、気づかれることもなく、徐々に様々な可能性を狭めながら、アデリー又は唯一の隠れ家である暗いアパルトマンへと帰っていった。

翌日、アデリーヌはいつものように目を覚ました。しかし、そのとき思い出したのは昨日触れたガストンという男の背中 of 冷たさだった。そのひんやりとした感触は昨日見たどんな景色よりも鮮明で、どんな音よりも耳に響いていた。自分とは無関係の世界がアパルトマンの外ですでに動いている気配がしたが、この世界のどこかにガストンがいるのだと思った。アデリーヌは飛び起きて、洗面所に向かった。そこにはいつもの白い自分の顔があった。アデリーヌは初めて出会った人物を見るかのように鏡の中の自分を見た。そして、ここにいる私がガストンと出会ったのだと思った。アデリーヌは細い右手をゆつくりと頬にあてた。

「君は天使かい、と彼は言った」

大事な秘密を打ち明けるようにアデリーヌは呟いた。その言葉は詩の一節のように現

実味がなかった。天使とはどういう意味だろう。アデリーヌは考えたが、よく分らなかった。あのガストンという名の男こそがアデリーヌにとって完全なる天使だった。空からパリのドフィーヌ又広場に落ちてきたあの男は、パリを眺めながらリングを齧ったのだ。背中が冷たかったのは羽を失ったせいかもしれない。急におかしくなつてアデリーヌは笑った。自分の笑い顔を見たのは久し振りだった。ガストンはこの顔を見てどう思つたのだろう。アデリーヌは眉間に小さな皺を寄せ、首を横に振り、勢いよく顔を洗つた。水は冷たく、アデリーヌは息を吐いた。冷えたタイルの感触を足の裏に感じた。

朝食を買いにパン屋へ行き、バターなしクロワッサンを二つ買った。ブルジョワ風のパン屋のマダムはアデリーヌを見ていつものようにボンジューと言つた。猛禽類のように鋭いマダムの瞳が微かに茶色いことにアデリーヌは初めて気がついた。アパルトマンに戻り、シリアルを食べ、クロワッサンをカフェ・オ・レに浸して食べた。窓からは朝日が差し込み、白い木製テーブルの上にパンくずの影がくつきりと浮かび上がっていた。

いつものようにポン・ヌフまでやってきた。橋は多くの車や人を背に乗せ、その下を流れるセーヌ河をじっと見下ろしていた。普段であれば、そのような橋の上で起こるであろうあらゆる災難や障害がアデリーヌの行く手を阻んでいた。しかし今日は違う。何がアデリーヌを立ち止まらせていた。まるで遠くに見える家の灯火が本物かどうか分からず目を凝らす旅人のように、アデリーヌはポン・ヌフの中央に立つ二つの館を見つめた。手に持ったパン屋の紙袋を握り締めると、雑踏の中でその音だけが大きく耳に響いた。アデリーヌは歩き出した。館の前まで来ると、アデリーヌはそこをゆっくりと通り過ぎようとしたが、無表情のままくると向きを変え、シテ島の奥に続く小路へと入っていった。

ドフィーヌ広場には誰もいなかった。その瞬間アデリーヌは息を吐き、特に何も無い風を装って広場の中をゆっくりと歩き出した。木々はもうほとんどその衣を脱ぎ捨て、

永久に変化しなくなった黒い彫刻のように広場の周りを飾っていた。本当にここだったのだろうか。歩きたびにみしみしと枯葉と砂がこすれあう音が聞こえた。昨日と今日では全てが違うのだ。同じことは二度と起こらない。毎日同じ劇を繰り返す舞台のようない日常にいた彼女にとって、それは大きな発見だった。アデリー又はベンチに座り、広場の周りを取り囲む美しい館を見回した。館の一階にはカフェや紅茶専門店が入っていた。小さなホテルもある。そのような店があることに昨日は気がつかなかった。しかしどれも営業しているのか分からないほど人気がなかった。全てはアンリ・ルソーの絵画のように現実のようである。どこかが違っている気がした。アデリー又は軽い眩暈を覚えた。息を吸い込むと、本格的な秋へと向かう濃密な空気がはつとするほど冷たかった。目を閉じると、ベンチと彼女自身の肉体を残して全ては消えて暗闇となった。次の瞬間、そこは鬱蒼とした緑の茂るジャングルになり、車の騒音が滝の流れる音のように遠くから微かに聞こえてきた。紙袋からクロワッサンとリングォを取り出し、ゆっくりと食べ

た。リンゴは以前にも増して糖分と酸味が増していた。いつもそうだった。母親が大量に送ってくるリンゴはノルマンディー特有の酸味と甘さを持ち、それはシードルやカルヴァドスになるはずだったリンゴの残り物だった。実家の庭、地面に落ちた大量のリンゴを頭に浮かべた。口の中の酸味はしばらく消えずに残っていた。ヴェリテ・ドウ・ラ・ポム（リンゴの真実）という彼の言葉を思い出した。それから一時間近くその広場にいたが、広場を横切ったのはプードル犬を連れた初老の男一人だけだった。

その日からドフィーヌ広場に寄ることが彼女の新しい日課となった。世界は相変わらずアデリーヌの外で不吉な歯車を動かし続けているように思えた。しかし館の間を抜けてドフィーヌ広場に入ると、歯車の音は聞こえてこなかった。そこには今までに感じたことのない神聖な静寂があり、遠い空の果てで待っているようなひっそりとした期待があった。それはアデリーヌにとって今まで知らなかった、もしくは忘れていたものだ

った。しかしそれが何かは彼女自身にも分からなかった。そしてその広場へリングとクロワッサンを持って出かけていくことが、自分の使命であるかのように彼女の気持ちを高ぶらせた。しかしあの日と同じ出来事は二度と起こらなかった。日は徐々に短くなり、広場はますます静かになっただけだ。あの人は本当に天使で、すでに空へ飛び去ってしまったのかもしれない。アデリー又はそう思った。仕事も見つからなかった。全ては今までと同じで、何も変わらなかった。黒い怪物は部屋の隅でじっと身を潜めていた。そのうちドフィーヌが広場から足が遠ざかるようになった。冷蔵庫の中のリングだけが徐々に変化を遂げていき、ついには食べられなくなった。

四

その写真に気がついたのは、サン・ジェルマン・デ・プレのギャラリー街を歩いているときだった。その日はたまたま母校エコール・デ・ボザールの前を通つて帰ろうとセーヌ通りを歩いていた。何故そんな気になったのかはアデリーヌ自身にも分からなかった。あのドフィーヌ広場へ入り込んで以来、アデリーヌはいつもの道から外れ、パリの中に隠れる別世界を意識するようになっていた。夕方のセーヌ通りは買い物客や車で混んでいた。右手の小さい通りの角には画学生御用達のカフェであるラ・パレットが見える。学校正門へと続くボザール通りまではもうすぐだった。そのとき、視界の中に自分を引き止める何かが見えた。普段であれば立ち止まらない雑踏の中で、アデリーヌは足を止めた。とあるギャラリーのショーウィンドウにモノクロの写真が飾られている。風景写真のようだったが、その風景にはどこか見覚えがあった。アデリーヌはその写真から目

が離せなくなった。写真に写っているのはドフィーヌ又広場だった。アパルトマンと街路樹が演劇の舞台のように美しく背景を飾っていた。

〈パリの天使〉

写真の横にはそう題されたプレートが置かれていた。ここで開かれている写真展覧会のタイトルのような。タイトルの下には撮影者の名前が書かれていた。

〈ガストン・カヴェニヤック〉

気づくとアデリーヌはその小さなギャラリーのドアを押していた。

「……ボンジュー」

そう言つてドアを閉めると、通りの喧騒が嘘のように消えた。小さなギャラリーだった。奥のカウンターにいた長身の女性がデスクトップパソコンから目を上げてボンジューと笑顔で答えた。途端にいつもの不安に見舞われたが、アデリーヌは不自然にならぬように辺りを見回した。すぐに手前の壁に飾られたモノクロ写真に目を奪われた。これも

ドフィーヌが広場を写したものだ、手前に黒い街路樹が沁みのようにぼやけて写っている。広場の外側から写したものらしい。ピントは中央のベンチに合わせてあり、そこに一人の女性が座っている。少し短めの黒いスカートから頼りなげな細い足を出し、白いブラウスの上にジャケットを着ている。アデリーヌは信じられない思いでその写真を見ていた。ベンチに座って何かを待つような横顔を見せているのはアデリーヌ自身だった。アデリーヌは壁にかけられた写真を次々と見ていった。パン屋の紙袋を両手に持ちながらどこかを見つめる自分、地面を見つめながらリンゴを持つ自分。どこかの建物の上階から写されたものもあった。モノクロの平面に焼き付けられた粒子を見つめながら、自分自身が他人の視界の中に存在していたことにアデリーヌは驚いた。しかし、写真の中にあるのは確かに自分なのに、何を考えているのかまるで分からなかった。不意にどこかから観察されているような気がして、アデリーヌは窓の外を見た。そこには先ほど歩いてきたセーヌ通りがあり、人々はギャラリーの存在に気づかないかのように家路

へと急いでいた。市バスが喘ぐようにのたのたと走りぬけ、不満そうなドライバーがそのあとを追っていた。アデリーヌの存在とは無関係の景色がそこにはあった。しかしアデリーヌは自分自身をどこかから見ている観察者の視線を感じていた。ガストンはやはりいたのだ。天使のように姿を隠して、毎日通っていたあのドフィーヌ広場にいたのだと思った。今もパリのどこかにいるに違いない。彼だけが自分の存在を証明する唯一の証人であるような気がした。そのとき、

「あなた、この写真のモデルじゃない？」

驚いて振り向いた瞬間、そこには背の高い女主人の顔があつた。先ほどは一瞬しか見なかつたので分からなかつたが、広告に出てくるモデルのような美しい女性だつた。そのときアデリーヌはあまりに狭い空間に初めて会う女性と二人きりでいることに気がつき、急に耐えがたい不安が押し寄せた。アデリーヌは何も言えず、急いでギャラリーの外へ飛び出した。急激な速さで闇が落ちてくる街路を、アデリーヌはセーヌ河に向か

つて駆け出していった。

フランス学士院を抜けると、芸術橋が見えた。夕暮れのボン・デ・ザールは若者たちで賑わっていた。ほとんどがエコール・デ・ボザールの学生だろう。皆グループを作って歩行者専用の橋の上で座り込んでいる。ワインを飲みながら何かを語る声が聞こえる。中にはギターを弾きながら叫んでいるヒッピー風の男や犬を連れて酒盛りをしている労働者、そして街灯の下で読書をする女性もいる。しかしアデリーヌは止ることなくその橋をすばやく歩いていった。橋桁の隙間からセーヌの黒いきらめきが見え、アデリーヌの耳に学生たちの笑い声が聞こえてきた。一体何を笑っているのだろう。久しく笑ったことのないアデリーヌには彼らの笑う理由が理解できなかった。しかし数年前、アデリーヌもボザールの学生としてここで夕涼みしたことがあったのだ。同期のジネットとエリーズの笑顔が思い出されたが、社交的な彼女たちにとってアデリーヌは単なる友人の一人でしかなかった。二人とはよく学校近くのラ・パレットでタルティーヌを食

べたものだった。二人ともそのカフェで自分の作品が完成する前から大いに語り、いかに新しいことを生み出しているかを主張しあっていた。まるで話すことによってその作品が生まれてくるかのように。アデリー又は当時、絵画を専攻していたのだった。建築専攻の学生と違って、絵で生活していくことは著名な芸術家にならない限り難しかった。フランスでは芸術家になろうと思えば誰でもなれたが、それで安定した生活ができるかは全くの別問題だった。ギャラリーでは意味の分からない抽象画ばかりが陳列され、それでいて皆ルーヴル美術館に写実的な古典を観に行く。もはやアングルやドラクロワがボザールで学んでいた時代とは違っていた。そしてルノワールやドガ、スーラの時代とも。ふとアデリー又はアパルトマンの戸棚の中に眠っている使い古した絵の具箱を思い浮かべた。それはもう永遠に手に届かないもののように思えた。橋の上からふとセーヌ河の上流に目をやると、夕暮れの中に沈むポン・ヌフが見えた。その中央にあるシテ島の奥にドフィーヌ広場があるはずだった。

気がつくともルーヴルの方形宮に来ていた。シュリー翼に囲まれた正方形の庭は、時間軸が不意に変化したかのような静けさが支配していた。先ほどまでのセーヌの喧騒が嘘のようだった。空はまだ青かったが、すでに夜の闇が音もなく落ち始め、周りを取り囲む後期ルネサンス様式の細かな装飾が薄闇の中に紛れていった。アデリーヌは目を閉じた。そして周りを囲むシュリー翼のどこかにあるアングルの「ヴァルパンソンの浴女」を想像してみた。今頃は暗い展示室で眠っていることだろう。私も絵の中に入り、あの霧の中で眠ってしまいたい。アデリーヌは方形宮の真ん中で立ち尽くし、瞼を強く閉じた。昔から自分は何も変わっていないのだ。数年前の学生時代、アデリーヌは学校の講義の傍ら学生共同アトリエで絵を描き、定期的に学校提携のギャラリーで展示会をしていた。しかしアデリーヌの描く写実と幻想を織り交ぜた絵は評価されず、人間関係においても他の画学生とうまくいかなかった。もともと人と上手くいったためしないのだ。密かに恋もしていたが、高校時代のあの出来事以来、男の人と口を聞くこ

とはできず、全てをしまいこんだまま学生生活を送っていた。しばらくすると絵を描くこと自体ができなくなつた。子供の頃からあれほど好きだつたはずなのに、急に何を描いていいのか分からなくなり、アトリエにすることが苦痛になつていった。それから自然にアトリエから遠のくようになり、学校を辞めて十九世紀の挿絵本を扱うオデオンの古書店に勤めることになつた。しかし仕事をしていてもぼんやりと考え事をするが多かつた。ミスも多く、お客ともうまく喋れなかつた。結局その書店をクビになり、今は無職だつた。社会的排除。新聞でよく聞く用語だつたが、それは明らかにアデリーヌ自身のことを示唆していた。あの時ポン・デ・ザールの上で語り合つた数少ない友人とはもうずいぶん会つていない。ジネットとエリーズは今どこで何をしているのだろう。過去の全てはパリを流れるセーヌのようにどこかへ消えてしまうのだ。きっと今いる自分自身は、パリを彷徨うただの影なのかもしれない。しかしあのギャラリーで見た写真は今ここに確かに自分があることを証明していた。ただそれをどう受け止めればいいのか

か分からなかった。

思考を続けながら、方形宮を西へ抜けるためにシュリー翼の通路を歩いた。暗がりの向こうに青く光るピラミッドが見えた。不意に闇の中で美しい音色が聞こえた。古びたコートを着た男が独りでフルートを吹いていた。闇の中で柱に寄り添い、男は悲しい音色を奏でていた。通路内にある小さな街灯の明かりを受けて、フルートだけが星の軌跡のように闇の中に浮かんでいた。アデリーヌはピラミッドを抜けてリヴオリ通りへ出た。途端に騒がしい雑踏の音に包まれた。通り沿いのブティック街は観光客で賑わっていた。半アーケードの下では明るい光を發した土産物屋が軒を連ね、パリと書かれた観光客向けの食器やシャツが無秩序に並べられていた。その間を首からカメラを下げたTシャツに半ズボン姿のアメリカ人観光客がのんびりとした表情でぶらついている。親子らしき日本人観光客がガイドブックを持ちながらチュイルリー庭園のメトロの入り口に立っている。気楽な観光客になれたらどんなにいいだろう。それから数時間、ア

デリーヌはガストンを求めてパリの街を彷徨った。まるで失くしてしまった自分の影を探るように。それ以外に何をしたらいいのか分からなかった。何故あのような写真を撮ったのか、ガストンに聞きたかった。それこそが今しなければならぬ唯一のことであるような気がした。

ガストンは見つからなかった。あのギャラリーで見た写真のことが気になっていたが、もう一度見に行く勇氣はなかった。店のマダムは質問にも答えずに逃げるように出てきてしまったためだった。自分の写真が今もあのギャラリーで展示されているかと思うと、アデリーヌは落ち着かなかった。まるで遺失物保管所に届けられた自分の大切な落し物を取りにいけないような焦燥感に何度も襲われた。いつものようにボン・ヌフを渡つてリュクサンブル庭園へ行き、マクドナルドで求人情報誌をもらつて帰る日が続いた。ギャラリーで写真を見て以来、ドフィーヌ又広場に足を踏み入れることはなかった。

そんなある日の午後だった。いつもの「儀式」から戻ると、共同玄関で管理人のマダムとぼったり出会った。鳥のように細い喉を震わせたマダムはアデリーヌの顔を見ると何かを思い出したかのように口を開き、皺だらけの手の平をこちらに向けて管理人室

に入つていった。そしてすぐにダンボールを抱えて戻ってきた。

「あんた、いつもの届いているよ」

壊れかけたラジオのような声で、マダムは「いつもの」という部分を強調した。母からのリングだと分かった。アデリーヌは礼を言つてそれを受け取つた。アパルトマンに持ち帰つてダンボールを空けると、中からは案の定マツの木でできた箱が出てきた。その中に白い封筒が見えた。アデリーヌはその封筒を取り出した。それは母からの手紙だった。

〈愛するアデリーヌ

パリでの生活はどうですか？あなたはリングにはもう飽き飽きしているかもしれません。でもリングは身体にいいし、私たち家族にとって大事なものだから今回も送ります。パリは人が多いでしょう。昔お父さんで行つたパリ旅行を思い出します。みんなあなたを親切に迎えてくれますか。親切にされなかつたら、あなたが相手に親切を与えて

あげればいいのですよ。もし与えた相手からお返しがなくても、不満を持つてはいけません。私たちが育てているリンゴは何かを求めてこない。それなのに、あんなに素晴らしい酸味と甘みを私たちに与えてくれるのだから。人間がどんな過ちをしたって、リンゴは全てを許してあの美味しさを届けてくれるのよ。リンゴを長く熟成させて作ったカルヴァドスは蒸発して量が減る。それは天使が飲んだからと言われているわ。何かを人に与えて少なくなったあなた自身も、それ以前と比べて成長しているはずよ。上質のカルヴァドスのように。

愛を込めて カトリーヌ

アデリーヌは手紙を読み終えると、キスをしてそれを丁寧に封筒にしまった。箱の蓋をずらして開けると、赤と黄に染まった小ぶりのリンゴの仄かな酸味が部屋の中にゆつくりと溶け出した。九月に送ってきたものより酸味の強いリンゴだった。

「ありがとうママ。でもこんなにいっぱい食べれそうにないわ」

アデリーヌは母親に向かって言うようにつぶやいた。いつも全て食べきれずに腐らしてしまっていた。奇抜な新進芸術家の展示で有名なパレ・ドゥ・トーキョーなら、腐ったリングのオブジェを喜んで受け入れてくれるかもしれない。アデリーヌは大量のリングを紙袋に入れて、アパルトマンの地上階の床に手紙つきで置いた。

ヘリング好きな方、どうぞ 五階のアデリーヌ・ルヴィエ

リングは二日後になくなっていった。もしかしたら管理人のマダムが処分してしまったのかもしれない（処分に關しては動きが恐ろしく速いのだった）。その間も、アデリーヌはいくつかの会社に履歴書を送った。しかしそのほとんどが返事なしだった。その中で三件、面接をしたいという返事が来た。ファーストフードのカウンターの仕事とオーガニックレストランの給仕の仕事、それにポンピドゥー・センター近くにあるベルギー書専門店の販売員だった。しかしどれも不採用となった。採用されるといふ結末は自分の人

生に用意されていないのだと思い、アデリーヌはますます目の前の人生が堅固な高い壁のように見えた。全ての人間が自分を拒否し、アデリーヌの届かぬスクリーンの向こう側で幸福なワインを飲んで笑っているのだと思った。その光景は非現実的で、具体性がなかった。しかし幸福なワインという幻想はアデリーヌの頭から離れなかった。夜にアハルトマンに一人でいると、世界は昔からこの閉じた部屋しかないように思えたし、パリやその他の世界が絵空事のようなだった。そんなとき、アデリーヌは冷え込んだ台所のテーブルに突っ伏して目を瞑った。そうするとドフィーヌ広場のこと、そしてガストンのことが闇の中にぼっかりと浮かぶのだった。たしかにあのとき二人はドフィーヌ広場にいた。そのことだけが今の自分にとって信じられる唯一のことだった。そしてあのギャラリーで見たモノクロ写真を思い出した。リングはまだ少し残っていた。ガストンのために残しておいたリングだった。しかしそれもいつかは腐り、実家の庭に落ちたリングと同じ運命を辿るだろう。黒い怪物は相変わらず大きな瞳で、部屋の隅からアデリーヌの

様子を窺っていた。

サン・マルタン運河はすでに暮秋の気配を漂わせていた。水面に近い石畳の上を赤茶色の落ち葉がまだらに埋め、葉の少なくなつた木々が黒々とした枝を陰鬱な曇り空に伸ばしていた。運河の先には鮮やかなオレンジ色をしたホームレス用のテントが河岸にずらりと並んでいるのが見える。振り返ると逆光となつた太鼓橋が緩やかなカーブを描いて美しいシルエットを見せていた。時折、ジョギングや犬の散歩をする人がアデリーヌの横を通り過ぎていく。先ほどまで霧雨が降っていた。いつもの習慣を抜け出して運河を散策するのは久し振りのことだった。家から近いこの運河がアデリーヌは好きだったが、最近はずっと来ていなかった。以前来たときはまだ水辺の木々が青々とした葉を茂らしていたはずだ。運河沿いのヴァルミー河岸をしばらく歩くと全身を鮮やかな緑色で塗られた店があつた。ヘルガル・ヴェールという名の写真専門の書店だった。

普段なら通り過ぎすその店の前でアデリー又は初めて立ち止まり、さりげなく店内の様子を確認した。すでに多くの人が熱心に写真集を物色している。ちよつと見るだけ。アデリー又はそう自分に言い聞かせて中へ入った。

こじんまりとした店内は一見インテリアショップのようにも見えた。手前の部屋には色鮮やかなデザイン関連の本が並んでいる。写真集は奥の部屋にあった。数人の男性客が写真集を手にとって熱心に見ている。棚にはウジエヌ・アジェやエリオット・アーウィット、それにロベール・ドアノーなどの写真集が目立ったが、それ以外は知らない写真家ばかりだった。ガストン・カヴェニャックという名前は見当たらなかった。目をあちこちに動かしながら背表紙に書かれたタイトルと写真家の名前を眺めていたが、不意に眩暈を覚えて目を閉じた。書店に來たのは久しぶりだった。店内に漂う静かな音が聞こえてくる。写真集をめくる音、控えめな咳払い、在庫を確認する店員の声、本の詰まったダンボールを運び入れる卸業者の掛け声。人は多くいたが、幸い呼吸困難に

なることはなかった。再び目を開けて辺りを見回した。そのときアデリーヌの瞳は中央テーブルに平積みになされた写真集を手にする白い手に吸い寄せられた。その白い手は写真集を戻して一瞬だけ宙を舞い、そして元の位置に戻った。次の瞬間アデリーヌはその手の持ち主を見つめた。相手がアデリーヌを見たのもほぼ同時だった。

「あら、あなた」

それはあの写真ギャラリーのマダムだった。

窓の外にはヴァルミー河岸が見え、濡れた石畳が光っていた。運河の対岸には雑然とした十区特有の建物が並び、工事用のクレーン車が見える。サン・マルタン運河沿いにあるアート展示場内のカフェで、アデリーヌとマダムはライム・ペリエを飲んでいた。学生食堂のような店内は賑わっていた。先ほど降った霧雨のせいもあるだろう。鮮やかな色合いの椅子に座った人々がカクテルやコーヒーを飲みながら話をしている。

「あそこの書店にはよく行くのよ。新しい写真家の本が充実してるの」

週に一度は店をアルバイトの女の子に任せて、ルガル・ヴェールまで足を運ぶのだという。マダムの名前はイザベルと言った。正確にはマダムではなく、未婚のマドモワゼルであった。イザベルはプラスチック製のコップにペリエをつぎ、吹き出る泡に目を細めながら飲んだ。

「あなたは？」

「私は、たまたま散歩していて、あの書店を見つけただけ」

アデリーヌはこの界限に住んでいることを話し、普段はほとんど散歩をしないことを話した。

「もつたいないわ。散歩しないなんて。パリに住んでいるならいろいろ見て世界を広げるべきよ。それが仕事のアイディアに結びつくことだってあるし」

イザベルは女優のような力強い瞳をアデリーヌに向けて話し続けた。アデリーヌは急

に耐えられなくなつて目の前のコップを見つめた。水面にはペリエの気泡が浮かび、初期のマグマのように弾けては消えていった。毎朝起きたときに感じるこの世界との違和感が再び彼女の全身を強張らせた。今回は逃げられそうになかった。しかし話しているうちにマダムはスクリーンの向こうの世界の人間ではなく、こちら側の人間であるような気がしてきた。パリの孤独に身を寄せる人間。そしてあのギャラリーの写真を撮ったガストンが今どこにいるか聞きたくなつた。そのときちょうどイザベルがアデリーヌの心を読んだかのように聞いてきた。

「あなた、あそこでガストンの写真集を探していたんじゃない？」

アデリーヌははっとしてイザベルを見た。まだ新人で写真集は一冊も出してないの。そう言つてイザベルはゴロワーズの箱から煙草を一本取り出して火をつけた。

「ギャラリーの写真ですけど」

アデリーヌはやっとの思いで言つた。

「全く知らなかったんです」

「分かっているわ」

アデリーヌは思わず彼女の瞳をまじまじと見つめた。

「あの写真は、被写体が意識していたら撮れない作品よ」

イザベルは片手に煙草を持ちながら微かに微笑んだ。

「つまりね、カメラを意識した時点で、そこに境界ができてしまうの。カメラのこちら側とあちら側ね（ゴロワーズの箱とペリエの瓶を交互に指差した）。私が無名の彼の作品を気に入ったのは、その境界線がなかったからなの。本当は世界に境界なんてないのに、皆それを勝手に作ってしまっているの。写真はそれを取り払う役割を持っているのよ。彼の作品にはそれがあつた。つまりあなたの意識の中に入ることができたの」

そう言われてもなかなかうまく理解できなかつた。アデリーヌは自分の表情や手の動きが不自然じゃないか心配していた。アデリーヌはペリエを飲んだ。発泡性の刺激が喉

を通る。

「彼が、どうしてあの写真を撮ったのか、それを聞きたいんです」

まるで石でも吐き出すようにつつかえながら、アデリー又は言葉を吐き出した。こんなに長い言葉、しかも正直な欲求を人に告げたのはいつ以来だろう。いつも以上に声が震えているのが自分でも分かった。そのことに全く気がつかないかのように、イザベルは両手を広げた。

「詳しくは分からない。でもあなたは自分だけの世界を持っているように見える。そして外の世界との間に境界を作ってしまったている。きっとガストンにモデルになつてくれと言われたら、断つてしまふでしょ。だから彼もあのようになつてそりと撮つたんじゃないかしら。盗み撮りはいい趣味じゃないわ。でも、それがいい結果を生むこともある」

アデリー又は黙つたままイザベルの話聞いていた。こんなに自分について分析されたのは初めてだったし、その分析は明瞭であり論理的だった。イザベルは私が孤独なことま

で知っているのだろうか。アデリー又は彼女の視線に耐えられなくなってペリエを飲み、息をついた。

「彼が今どこにいるか知っていますか？」

「それが問題なのよ。むしろあなたに聞きたいわ」

イザベルが知的な瞳を興奮させて身を乗り出した。翡翠のような二対の瞳は人を動揺させるほど美しかった。写真を展示し始めてから連絡がないという。

「彼は携帯電話を持っていないでしょ。あれつきりギャラリーにもやってこないのよ」

ゴロワーズを吸いながら、イザベルは目を細めて窓の外の運河を見つめた。彼女の見える運河の河岸では一人の女性がマフラーに顔を埋めて立っていた。ガストンは今どこで何をしているのだろうか。アデリー又はガストンが透明な羽をはばたかせて空へ帰っていく姿を思い浮かべた。

二人はカフェを出た。石畳はまだ濡れていた。またギャラリーへいらっしやい。イザベル

はそう言つて、少し北へいったところにあるメトロへと歩いていった。その後姿には気品とある種の奔放的な自由さがあった。話は難しかったが、彼女とならまた話してみたいと思つた。イザベルからもらった名刺を見ると、イザベル・ドラヴァクエリという名前の下にヘギャラリー・セルパン・オ・パラデイ(楽園の蛇)と書かれていた。

ついにエレベーターが故障したらしい。サマリテーヌデパートにかつてあつた鉄の手摺を材料にしたかのようなエレベーターのドアには、管理人の妙に流麗な字で、

〈偉大なガラクタにつき故障中〉

と書かれていた。巨大イグアナのげっふもしばらくは聞けそうになかった。いつもの「儀式」を終えたアデリーヌは床の軋む木の階段を上がつて五階までいくことにした。螺旋階段はまるでだまし絵の中に出てくる無限世界のようなだった。眩暈のしそうな階段を一段一段静かに上っていく。そのとき上のほうでドアが閉まる音がし、誰かが降りてきた。アデリーヌは小動物のように目を丸くして立ち止まった。快活な足音からベルナールでないことは確かだった。もっと硬質で自信のある響きだ。ついに悪魔がやってきたのだらうか。足音は徐々に近づいてきた。そしてすぐに、アデリーヌの真上にある階段

から聞こえてきた。もう逃げられなかった。アデリーヌは覚悟してその到来を待った。現れたのは栗色の前髪を揃えた一階下のマダムだった。淡いモスグリーンのニットにダークブラウンのロングスカートをはいていた。

「あら、あなたリングゴの人」

彼女は開口一番にそう言った。その優しい瞳はアデリーヌに対して好意的だった。アデリーヌはあつけにとられたまま、そのマダムを見つめた。アデリーヌのリングゴを持ち帰ったのは彼女だった。二人は挨拶を交わした。オーレリーという名のマダムはそのリングゴを使ってタルトを作ったという。

「子供たちも大喜びだったのよ」

彼女の二人の子供たちは何回か見かけたことがあった。女の子と男の子だ。おそらく幸せな家庭の主婦なのだろう。リングゴがそのような予想もしない見事な使われ方をしたことにアデリーヌは驚いた。ギャラリー・ラファイエットの料理本コーナーに置かれた

雑誌の表紙にあるような色鮮やかなタルト・オ・ポムが頭に浮かんだ。ノルマンディーの実家から送られてきた酸味の強いリンゴが、一方ではガストンという男の空腹を満たし、一方では裕福なマダムのひどく平和で家庭的なレシピになったのだった。アデリーヌはオーレリーに役に立ててよかったですと言った。それから二人は同じ建物に住むもの同士の親密で温かな笑みを交し合った。しかしアデリーヌは落ち着かなかった。笑顔の背後にあるアデリーヌの深い闇に、オーレリーが気づいてしまうことを恐れていた。もし気づかれたら、自分はアパートから追い出されるだろうと思った。

「あなた何している人？」

知的で柔和な瞳がアデリーヌの顔を見つめていた。

「今、無職です。仕事を探しています」

やっとの思いでそう言って、アデリーヌは俯いた。自分がとても惨めな小さい動物になったような気がした。

「どんな仕事を探しているの？」

「なんでも。最近までオデオンにある小さな古書店で販売員をしていました」
息が詰まりそうになりながら、アデリーヌは一気にそう言った。

「あら、じゃあ仕事を紹介できるかもしれない」

アデリーヌは顔を上げた。こちらの不安な世界とは対極にあるかのような彼女の顔に浮かぶ笑顔をアデリーヌは信じられぬ思いで見つめていた。オーレリーはポンピドゥー・センター内にある公共情報図書館に勤める司書だった。

「アルバイトなんだけどね、今ちようどスタッフを探しているところなの。内容は本の整理作業。単純労働だけど、本好きなら悪くないと思うわ」

アデリーヌは明日面接を受けることになった。図書館の人事部長に連絡をしてくれるという。携帯電話の番号を交換してオーレリーと別れた。アパルトマンに帰ったアデリーヌは、何故彼女はこんな私に対して親切なのだろうと不思議に思った。答えは

出ず、ただお菓子のCMに出てくる理想的な家庭の主婦のようなオーレリーの笑顔がブラウン管越しに見るテレビ映像のように浮かんでいた。

翌日、アデリー又はポンピドゥー・センターへ向かった。社会の不況と自分の自閉的な性格の二重構造の中で、面接の機会を得られたことは奇跡に近かった。巨大な作りかけの工場のようなポンピドゥー・センターの中のオフィスで、アデリー又は緊張しながら面接官がやってくるのを待っていた。自分がポンピドゥー・センターに居ること自体が信じられなかった。落ち着かない気持ちで、部屋に掛けられた時計を見つめていた。半分壊れているのか、時計の秒針が何度も同じ場所を行ったり来たりしていた。秒針は十一のところまでブルブルと震えているようにも見えた。それがまるで前へ進めない自分自身のことのように見えた。数分後、面接官がやってきた。セバスチャンという人事部長は、喜劇に出てくる小太り男のカリカチュアのようなようだった。彼に人生はなく、もっぱ

ら面接官という役回りを器用にこなしているように見えた。アデリーヌは緊張しながら、その喜劇役者に向かって自己紹介をした。セバスチャンはアデリーヌの経歴について特に関心はないようだった。

「ほうほう、画学生だったんだね。で、九月までオデオンの挿絵本専門の古書店で販売の仕事をしていた」

セバスチャンは紙コップに入ったコーヒーらしき液体を飲んだ。紙コップの下からセバスチャンの大きな顎が見えた。

「セボン（よろしい）、いつから働けるかね？」

「いつからでも」

「セボン」

それで面接は終わった。それからセバスチャンは再びセボンセボンと笑いながら、明日から働いてほしいと言ってきた。そしてこの図書館についての説明をし終えたあと（一九

七七年にオープンしたポンピドゥー・センターの中枢部門としてできた公共情報図書館。ヨーロッパ最大のメディアテークというのを強調した、空になった紙コップを持って立ち上がり、

「では明日の十一時に同じ場所へ来るように」

と言つて、笑いながらどこかへ消えてしまった。アデリー又は座ったまま動けなかった。今終わった面接が、まるで演劇の舞台のように思え、本当に自分に起こったことなのか分からなかった。しかし、これはどうやら事実のようだった。今まで何度となく彼女を拒否し続けてきた面接の壁が、あまりに簡単に目の前で崩れたのをアデリー又は信じられぬ思いで見ている。そしてそれは間違いなく、同じ建物に住むオーレリーの推薦が力になっていた。フランス社会はこのような人脈によって複雑に組み上げられた不完全で不条理な社会なのだ。そのよく分からないカフカ的世界に今自分がその一部として歓迎され組み込まれていくことが信じられなかった。あのリングゴが私を助けてくれた。

自分の周りを覆っていた闇がふいに消え、その向こうに見えたのはオフィスの白い壁であり、乱雑に詰まれたカタログの山であり、ステンレス製の本棚に突っ込まれた色とりどりのファイルであった。

翌日からポンピドゥー・センターでの仕事が始まった。ポンピドゥー・センターの最寄り駅であるランビュトまではレピュブリックからメトロの十一番線で一本だったが、アデリーヌは徒歩で二十分かけて通勤した(メトロに乗れないことはセバスチャンに黙っていた)。センター内にある公共情報図書館がアデリーヌの新しい職場となった。昨日と同じ場所で待っていると、女性スタッフがやってきてアデリーヌに挨拶した。スタッフに連れられて入った図書館は非常に未来的で広大な施設だった。しかしここに来るのは初めてではなかった。学生時代、何度か美術書を読みに来たことがあった。セキュリティが厳しく、図書館へ入るために一時間以上も並んだのを覚えている。

スタッフの話聞きながら、アデリー又は図書館を歩いた。一階の受付は吹き抜けの空間になっており、ガラスの壁を隔てた隣は美術館の企画展示フロアになっている。今はベルギーの漫画家の大掛かりな展示をやっているようだった。オーレリーは受付の総合案内所で勤務していた。カウンターに質問にやってくる利用客の対応をしたり、インターネット端末の予約チケットを配る仕事をしていた。忙しそうなオーレリーに挨拶をしてから、スタッフと一緒にエスカレーターで二階フロアへ上がった。二階には世界各国のテレビ番組が見られるテレビ室や膨大なCDコレクションを持つ素晴らしいオーディオルームがあり、多くの人間がヘッドフォンをしながら自分だけの世界に浸っていた。そして各フロアにはパソコンの端末が置かれていて、その横の広い机では学生たちが無心になって勉強していた。中にはホームレスらしき男も交じって本を読んでいる。アデリー又は人の大勢いる場所で働くことを恐れていたが、ここでは逆にその心配はなさそうだった。皆、独りの世界に入っているので自分に危害を加える人間はいなかった。

「あなたの職場は主にこの二階ね」

スタッフはそう言つて、飲食スペースの隅にある赤いカートの前にアデリーヌを連れて行つた。それは本返却カートだった。そのカートは利用者が読んだ本を置いていくことができるスペースで、すでに大量の本が山積していた。文学、医学、プログラミング、法律、建築、写真、映画、美術史とあらゆるテーマの書籍がそこに積まれている。本の貸出は一切していないために、皆読んだ後はここへ置いていくのだった。それら山積みになされた知の破片を、一冊ずつ元の棚に返していくのがアデリーヌの仕事だった。図書分類コードの表示された鮮やかな紫色のパネルを確認しながら、あらゆる棚の間に入り込み、あるべき場所に本を戻していく。それだけよ。でも単純でいて奥深い仕事なのよ。そう言つてスタッフはアデリーヌに図書分類コードのコピー地図を渡して去つていった。すぐに仕事が始まった。最初は多くの利用客がいる中で働くのが落ち着かなかつたが、すぐに慣れていった。誰も自分のことなど気にしていなかつたし、本棚の間を書籍の積

まれたカートを押して歩くときはシユティフターの小説に出てくる森で木苺を摘む田舎娘のような穏やかな気持ちにさえなれた。本を一冊もとの場所に戻すことによって、自分は世界の知の秩序を再構築することに貢献しているのだと思つた。そして何よりも、私は今ここに認められて存在している。もう公園にいたときのような透明な存在ではない。あのリンゴがなければ、今自分はここにいなかった。オーレリーだつて、たとえば階段ですれちがつても挨拶だけで終わつただろうし、そもそもエレベーターが故障しなければすれ違うこともなかったかもしれない。人間の今いる場所への道はなんと繊細にできているのだらう。渡り終えた瞬間に、今渡つてきた道の危うさに気づくのだ。そしてこの世界の絶望的なまでの不条理さも。アデリー又はそう思い、しばしカートを進める手を休め、大きな窓から降り注ぐ光の白さに目を細めた。

一週間も経つと、アデリーヌは一通りの仕事に慣れた。ルナル通りにある金網張りのスタッフ専用の通用口から支給されたIDカードを使って中に入り、スタッフ用休憩室でコーヒーを飲む（面接のときにセバスチャンが飲んでいたのはこれだった）。そして十一時になると二階のフロアに行つてカートの中に積まれた本を一冊一冊棚に戻していく。夜の八時に全ての作業を終えて、帰途に着く。オーレリーと会うのは図書館だけで、アパルトマンの階段ですれ違うこともなくなった。私生活ではほとんど関わりがなく、彼女について知っていることといえば、息子と娘がいることくらいだった。生活が変わつた。そのため、左岸へ渡る必要もなくなつてしまった。図書館にいる時間が増え、生活リズムは無職のとき以上に単調なものになった。ポン・ヌフを渡ることもなくなり、ガストンの姿はアデリーヌの中で徐々に透明になつていった。ドフィーヌ広場もリュクサ

ンブル公園もあの写真ギャラリーも、徐々に遠く離れていった。しかし、完全に消えてなくなることは決してなく、夜になるとその姿が再び濃くなるのだった。そしてガストンの背中の冷たさだけが、時折アデリーヌの心を強く締め付けた。

そんなある日のことだった。その日は火曜日でポンピドゥー・センターの定休日だった。アデリーヌはアパルトマンでエマニユエル・カレルの小説を読んでいた。そのときオーレリーから電話があった。

「今アパルトマンにいる？」

「はい」

久し振りに鳴った自分の携帯電話に驚きながら、アデリーヌは返事をした。オーレリーは子供を迎えに三区にある小学校に到着したところだった。しかし、すでに二人はいなかったという。校長先生に聞くと、今日はバスで帰ると言っていたらしく、迎えの人が誰も来ないことに不審に思いながらも帰ってしまったのだという。オーレリーは怒

りを抑えた低い口調で学校の無責任さを話し続けていた。

「悪いけど、私のアパルトマンに見に行ってくれないかしら？バスでならもうそつちに着いているかも」

仕事以外で人に頼み事をされたのは初めてだった。やはり私もパリの住人なのだ。まるで自分にも人並みの日常があるような気にさえなり、アデリーヌは一つ下の階のオーレリーのアパルトマンに向かった。そこはアデリーヌと全く同じ造りのドアだった。ドアの下にはビヤンブニュ(ようこそ)と書かれた鮮やかな緑色のカーペットが敷かれている。アデリーヌは控えめにドアを叩いた。しばらく待ったが、反応はなかった。もう一度叩いてみたが同じだった。ドアを試しに引っ張ってみたが、鍵が閉まっている。どうすることもできずに、アデリーヌはドアの前に立ち尽くしていた。アデリーヌはよくオーレリーのアパルトマンを想像したことがあった。暖色系のソファの上にはオーレリーの子供たち二人が並んで座り、ミルクやバゲットの乗った食卓には美しいラベンダー色のテーブル

ルクロスが敷かれている。キッチンのオープンにはタルト・オ・ポムが焼きあがり、それは琥珀色に輝いている。いつも寝ている暗い井戸の底のような自分のアパルトマンの下に、そんな世界があるのだと思っていた。しかし今感じるのは途方もない闇だった。返事の無いドアの向こうには何も無いのではないか。私の世界はどこにもつながっていないのだから。アデリーヌはオーレリーに電話をかけた。

「帰っていないみたい」

一瞬の沈黙があった。

「そんなはずはないのよ。バスだったら、もう帰っているはず」

「でも、返事がないのよ」

電話の向こうには、アパルトマンと同じ闇のような沈黙があった。微かに小学校のざわめきが聞こえ、それは宇宙の果てから聞こえるアデリーヌの知らない世界のようにだった。

「すぐに帰るわ。子供たちが帰ってきたら連絡して」

電話は切れた。アデリーヌはしばらくの間オーレリーのアパルトマンの前で立ち尽くしていた。今頃オーレリーはここへ向かっているのだろう。しかしそれが本当に今起こっていることなのかアデリーヌには分からなかった。

十分後、オーレリーはアデリーヌの前に姿を現した。アパルトマンに戻ってきたとき、オーレリーの顔面は蒼白だった。縋るような瞳でアデリーヌを見つめたまま数秒間無言でいた。アデリーヌは子供たちはまだ帰ってきていないと言った。オーレリーは階段に座り込んで携帯電話を握り締めながら、両手を上下に振って頭を垂れた。図書館の受付カウンターにいるときの毅然としたオーレリーの姿はどこにもなく、その後姿にはある喪失を経験した人間に見られる焦燥感が現れていた。アデリーヌはオーレリーの横に座った。隣に座ることでオーレリーの悲しみと一体になろうとしたが、オーレリーの身体はあらゆるものを突き放す悲しみに覆われていて、これ以上近づけそうになか

った。オーレリーは薄い唇をかみ締めながら青い瞳を震わせていたが不意に、

「そうだわ」

と叫び、手に持っていたことを今気づいたかのように携帯電話を見つめ、すぐにどこかへ電話をかけた。しばらくして相手が出た。

「ブリュノ、そつちにアレクサンドルとセリーヌが行ってない？」

オーレリーの瞳は希望と焦りが混ざり合い、昼下がりのアパルトマンの階段に漂う光の中で子供たちの姿を見つめているかのようだった。どうやら相手は夫らしかった。

「そう。分かつてるわ、でも。とにかく来たら連絡して」

オーレリーは電話を切ると同時に階段を降り始め、あなたも来て、と目でアデリーヌに合図をした。通りに出ると、オーレリーは窓掃除をするかのように空中で手を振ってタクシーを呼び止め、目の前で停車したタクシーに乗り込むと、再びアデリーヌに目で一緒に乗るように指示した。そして運転手に向かってパリ市庁舎まで急いでと告

げた。アデリーヌがドアを閉めたと同時にタクシーは走り出した。

「つき合わせてごめんなさい。でも一人じゃ心細くて」

こんな弱々しいオーレリーを見るのは初めてだった。いつも背筋を伸ばしてカウンターに座り、図書館利用者の質問に的確に答えるオーレリーはどこかへ消え、今はただ子供の安否を気遣う母親の表情が儂げで美しい横顔に表れていた。アデリーヌは微かに微笑みながら、大丈夫よ見つかるわとオーレリーに言った。だといんだけど。そう言つてオーレリーは窓の外を流れるパリの景色を眺めた。彼女の夫はラジオ・フランスに勤めていた。パリ市庁舎の広場から出る七十二番バスなら、セーヌ沿いを走つてラジオ・フランスまで行ける。もしかしたら二人は父親に会うためにそのバス停まで行つたのかもしれないとオーレリーは言った。緩慢なレピュブリック広場を出たタクシーは、いつものアデリーヌの通勤ルートをなぞるように快走し始めた。

「でもなんで父親の職場に？」

「夫とは、六月に離婚したの」

窓の外を眺めたままオーレリーは言った。その横顔にはすでに慣れきってしまったある種の悲しみと疲労がにじみ出ていた。離婚して以来、オーレリーは子供二人との三人暮らしだった。二週間に一回は元の夫を交えて会食をしているが、やはり子供たちは父親が恋しく、何度もラジオ・フランスに行きたいと駄々をこねたのだという。オーレリーが離婚していたとは初めて知る事実だった。結婚経験のないアデリー又はただ黙って聞くしかなかった。トゥルビゴ通りを抜けると、アール・ゼ・メテイエ駅前のカフェが見えてきた。二人を乗せたタクシーは交差するポール通りを南下し、中華街を抜けて職場のあるポンピドゥー・センターの横を通り過ぎた。不意にタクシーはリヴォリ通りより数十メートル手前の赤信号で止まった。渋滞しているようだった。通りの先にはノートルダム大聖堂が蜃気楼のように聳え立っていた。タクシーの中は静かだった。エンジン音だけが、車内と外の世界とを隔てる背景音楽のように緩やかなリズムを保ってい

た。

「ここでもいいわ、降ろして」

オーレリーは慌しく運転手に十ユーロ札を渡すと、ドアを開けて外へ出た。アデリーヌも急いで外に飛び出した。二人はリヴォリ通りに向かって走った。通りは激流の大河のように二人の行く手を阻んでいた。そこを渡るまでに交差点を二度渡らねばならず、その時間は二人にとって永遠にさえ感じられた。眼前に噴水とパリ市庁舎が見えた。問題のバスは市庁舎広場の右側にある建物の後ろに見えた。エンジンを切って停まっているらしい。待つことに耐え切れず、二人はメトロの地下通路を潜って通りを渡ることにした。悪魔の口のようなメトロの入り口を見てアデリーヌは一瞬迷ったが、オーレリーのあとについてメトロの階段を降りた。数年ぶりに入るメトロは異世界の入口のように薄気味が悪かったが、それは一瞬のことだった。再び光溢れる地上に出たとき、すぐ十数メートル先にバスがまだ停車しているのが見えた。オーレリーは階段を全速力

で走ったせいで息を切らしていた。アデリーヌはオーレリーを追い抜いて石畳を走り、一人でバスに近づいていった。バス停まで来ると、アデリーヌは窓越しにバスの中を見た。果たして後部座席にアレクサンドルとセリーヌの姿が見え、アデリーヌは待つてと言いながらバスに飛び乗った。その瞬間ドアが閉まり、アデリーヌがボンジューと言うと同時に運転手はエンジンをかけ、息を吹き返した水牛のように車体を震わせたバスは、このバスはポルト・ドウ・サンクル行き、というアナウンスを流しながら勢いをつけて走り出した。アデリーヌが外を見たときには、すでにこちらに向かうオーレリーの姿が遠ざかっていた。

アデリーヌはアレクサンドルとセリーヌの隣に座った。

「ボンジュー」

「ボンジュー、リンゴのお姉さん」

アデリーヌは微笑み、そして乗り遅れたオーレリーに電話をかけた。

「大丈夫。二人ともバスの中にいたわ」

母親の直感に驚きながら、アデリーヌは言った。オーレリーの息を吐く音が聞こえた。オーレリーは次の停車場で二人を降ろしてほしいと言った。そのことを二人に告げると、母親の命令に不服の二人はノンと言って、父親の勤めるラジオ・フランスに行くまでは絶対に帰らないと言った。

「絶対に、絶対によ」

セリーヌはそう言って口を膨らませた。二人はやはり父の職場であるラジオ・フランスに行こうとして、小学校のあるマレ地区からここまで歩いてきたのだった。

「学校近くにね、屋根のある市場があって、面白い人形さんとか飾ってあったの」

セリーヌは寄り道した屋内市場での出来事得意そうに話した。新進アーティストへ展示ブースを貸している屋内市場であった。

「ネジやのこぎりで作ったワニもいたんだぜ」

そう言つてアレクサンドルは目を丸くした。二人は寄り道を楽しみ、その後に父親に会いにいらつていた。ひどく無邪気なその想いにアデリーヌは胸を打たれた。それ以外に学校を無断で去つた理由はないようだった。そのことをオーレリーに告げると、夫は仕事で会えるはずもないから無理だろうけど、行くだけ行つてすぐ引き返してほしいと言つた。そのためアデリーヌは二人を連れてラジオ・フランスまで行くことになつた。今までにない大きな使命を背負つたアデリーヌは、二人を見守る守護天使のように窓の外を見る子供たちの後姿を見守つていた。二人は流れる景色を見ながら、何かが見えるたびにアデリーヌにその名前を聞いてきた。アデリーヌはそのたびに正確に答えた。チュイルリー庭園の移動遊園地、アンヴァリッドの黄金のドーム、アルマ橋に立つ宇宙人の顔のような街灯。今自分が見ている景色と子供たちが見ている景色が同じであることに驚きを感じ、この瞬間自分は確かにパリに存在しているのだと思つた。

その「事件」以来、アデリーヌは前以上にオーレリーに対して親密な気持ちになれた。オーレリーの秘密を一つ知ったせいかもしれない。離婚という事実が別に秘密にしているわけではなかったし、ポンピドゥー・センターの同僚の多くは以前から知っているようだった。しかしアデリーヌにとって、その事実は大きく、それはまともな人生の一つの試練であるように思えた。アデリーヌには決して手に入れることのできない人生の中で生じる苦しみをオーレリーは常に感じているのだと思った。

アデリーヌはアレクサンドルとセリーヌのお守りを積極的に手伝うようになった。日本文化に関心のあるオーレリーの薦めで、ビラケムにある日本文化会館で行われた一日体験の墨絵教室に二人を保護者として連れて行った。二人とも墨で山や太陽を描き、ヒラガナという日本語で自分の名前を書いて大得意だった。一緒にリュクサンブール公園へ出かけ、パン屋で買ってきたチョコエクレアをベンチで食べたもした。二人にとってエクレアは口という大海にせまり来る幸福な軍艦であった。二人の笑顔はアデリーヌ

に昔を思い出させた。アデリーヌにも複雑な不安の一切ない楽しかった時代があったのだった。いつも透明な存在として公園にいたアデリーヌは、自分が子供たちと全く同じ生き物で、ただ少し多く時を経ているだけの違いに過ぎないことに気づいて驚いた。しかしそれと同時に、自分にはこの先にもう何も無いことを思った。それは底のない冷たい井戸のような深い悲しみだった。

そして、徐々にいつもの不安がアデリーヌの全身を再び覆い始めた。それは、自分だけがどこへも進まずに留まっているという焦燥感だった。図書館では多くの学生が本を読み専門知識を学び、自分の人生の目標を目指している。しかし自分は人生のどこを歩いているのか見当さえつかず、ただ皆の残した大量の本を元の場所に片付けるだけだった。ロートル・カフェで求人情報誌をめくることはなくなったが、カフェには仕事へ行く前によく出かけた。コーヒーを飲みながら、自分だけが人生を与えられず、同じ場所で足踏みしているのではないだろうかという考えが頭から離れず堂々巡りしてい

た。私自身に物語はない。まるで映画のスクリーンの前に永遠に座り続けているような気分だった。こんな風に考えるのはきつと自分だけなので、アデリーヌは誰にも相談できなかつた。もともとパリでは相談する相手もいなかつた。オーレリーは一階のカウンターに一日中座り、利用客の対応に追われていて忙しそうだった。子供のお守りをするので、オーレリーはアデリーヌに信頼を寄せていた。それだけにアデリーヌは自分のおかしな悩みを打ち明けることができなかつた。そんなときアデリーヌは消えてしまった。ガストンのことを考えた。彼はあなたの意識の中に入ることができたの。イザベルの言葉を思い出した。あのドフィーヌ広場は、今もあそこにあるのだろうか。アパルトマンの間では、黒い怪物が何かを待ち構えているかのように、獰猛な瞳を光らせていた。

万聖節も終わり、パリは本格的な冬に入ろうとしていた。街には焼き栗売りが現れ、デパートのショーウィンドウにはクリスマスを楽しむ操り人形たちが現れた。通りのブティックも冬らしい暖かな光に満ちたディスプレイに変わっていった。しかし日増しに陰鬱になるパリの空のように、アデリーヌの感情は光を通さずに閉じられたままだった。

ある日の仕事の帰り道、アデリーヌは街中でベルナルを見かけた。一つ上の階に住む不気味な老人は、マレ地区にある小さなバーのカウンターに腰を下ろしていた。そこはポンピドゥー・センターから東に延びる通りの突き当たり、ヴィエユ・デュ・タンブル通りに面した古びたバーだった。店内には黄色い光が浮かび上がり、陽気な客たちの

肩の動きがまるで稚拙な影絵のようにガラス窓に貼り付いていた。アデリーヌは通りに立ったまま、黄色い光を浴びた老人の横顔を見ていたが、目を逸らそうとした瞬間、不意に通りに顔を向けた老人と目が合ってしまった。ベルナールは闇の中で敵に見つかった鼻のように目を大きく見開いた。ガラス越しに二匹の動物の瞳がぶつかり合う。老人の深く窪んだ瞳は徐々に収縮し、和らぎを帯びたように思えた。ベルナールは大きな手をゆつくりと上げ、マリオネットを操るかのようにアデリーヌに向けて太い指を下に動かした。それは何か魔法をかけるときの秘密の仕草のようだった。アデリーヌは目を丸くしたまま老人を見つめていた。しかしその老いた鼻の瞳に敵意がないことを知ると、彼の太い手に引き寄せられるようにゆつくりとバーの中に足を踏み入れていった。

「驚いたな。過去へと沈み込みそうなあの階段以外であんたと会うとは」

老人はひどく陽気だった。おそらく酒のせいだろう。バーの中は暖かで、濃密な酒とタバコの匂いがアデリーヌの全身をすぐに包み込んだ。アデリーヌはベルナルルのスツールの近くに立ったまま、どうしたらいいか分からずに遠慮がちに店内を見回した。バーに入るのは生まれて初めてだった。店はかなり混みあっていた。カウンターはU字型をしており、その中で白い調理用の服を着た給仕が客にビールを注いでいた。

「このカウンターは馬蹄の形を模したものなんだ」

ベルナルルはそう言ってカウンターの表面を太くしわくちやの手で愛しそうにさすり、このバーの名前がヘプティ・フェル・ア・シュヴァル（小さな馬蹄）だということを教えてくれた。ちょうどそのとき、店内の奥から二人の男客が現れ、外へと出ていった。それを見たベルナルルは、よし奥へ行こうと言い、スツールから腰を上げて奥の部屋へと歩いていった。店は縦に長く、馬蹄型のカウンターの裏には隠れ部屋のようなテーブル席があった。二人は空いたばかりの奥の席に腰を下ろした。椅子は横に積み上げられた木で

できており、背中の部分が緩やかに湾曲していた。その座り心地はアデリーヌにドフィ
ーヌ広場に置かれた孤独なベンチを思い出させた。壁には抽象画が掛けられており、
黄色い暖かな光が狭い室内を気持ちよく照らしていた。

「たまには事件もあるもんだな。一つはあんたがここを通りかかったこと。もう一つはこ
の席に座れたことだ。ここは人気席でなかなか座れんし、わしのような独り身だと座
りにくい」

そう言つてベルナールは給仕にレフビールを二つ頼み、あんたビール飲めるよな、とアデ
リーヌに念押しして豪快に笑つた。ビールはほとんど飲めなかつたが、それを言う暇さ
えなかつた。この老人の屈託のない笑顔を見たのは初めてだった。気難しい老人の初め
て見る笑顔は、まるで太古の情景が突然目の前に現れたかのようなだった。バーの明りの
中で見るベルナールは、アパルトマンの暗い階段や地上階ですれ違ふときの草臥れた男
とは別人であつた。階段をゼエゼエ言いながら緩慢に階段を上つていく老人の足音を自

分のアパルトマンで聞いていた自分が、今その音の主と一緒にいることに驚いた。彼が階段を上るのは、健康のためであった。

「こう見えても昔は登山が趣味だった。アルプスには何度も行つたさ。あれに比べれば、パリのどんな高いところも屁じゃない。サクレ・クールだつてちよろいもんさ」

そう言つてベルナールは顔の中心に無数の皺を寄せてまた笑つた。アデリーヌは美術学校の近くに登山専門の書店があつたことを思い出した。すぐにビールがやってきた。ベルナールは一口飲み、昔話を始めた。彼は一年前までこの近くにあるパリ市庁舎で警備の仕事をしていた。定年になり、妻が先に亡くなると、ベルナルの人生は急激な孤独の穴に落ち込んでいった。だが市庁舎で働いていた頃から通つていたこのバーには毎日のように通い続けていた。

「同じところへ来るっていうのは、一つの儀式さ。それにここは小さなビストロでもある。こここのオニオンスープは最高だぞ」

ベルナルはオニンスープとパンを注文した。老人の昔話を聞きながら、アデリーヌは自分が時の流れの中で泳ぐ一匹の魚になったような気がしていた。ベルナル老人にも若い頃があり、ただ彼はアデリーヌより更に下流を泳いでいる魚だった。二人は同じ川の中で泳いでいた。そして今たまたま頭を水面上に上げて顔を見合わせる事ができたのだ。アデリーヌは急に老人の表情の中にある何かを意識するようになった。それは彼の皮膚に刻まれた皺であり、ビールによって光った唇であり、穏かな光の中で照らし出される老人の眠たげな瞳であった。それはきつと自分自身の中にも同じように熟成されているものに違いなかった。もはやベルナルは闇の中で階段を通り過ぎる別世界の怪人物ではなく、アデリーヌと同じパリの孤独者だった。

「浮かない顔をしているな、若いのに」

そう言つてベルナルはビールの最後の一口をおいしそうに飲んだ。何十年間、何千杯と飲んできた同じビールが、時を刻んだ老人の体内に流れ落ちたのだと思つた。

「最近は何つまらん顔をしとる。パリはいつだって不満の塊さ。わしも現役のときはまさにメトロ・プロ・ドド(通勤、仕事、睡眠)の生活だった。それ以外にあるものといったら、失業、失恋、貧困くらいさ。けどな、たとえどんなことがあっても人生は悲観するよなものじゃないんだ。道があつたら歩けばいい、好きになつたら恋すればいい。お嬢さん、いやアデリーヌ、あんたはいつも下を向いて怯えて、もうすぐ世界の終わりが来るって思っているんじゃないのか。しかし、今ここにいること以上の幸せがどこにある？ 今したいことをしないで、一体いつやるんだ？」

アデリーヌはなんと答えればいいのか分からず、ただグラスを傾けた。甘く濃い液体が喉を通っていく。これから先、一体何杯のビールを自分の中に流し込むのだろう。ビールの一杯は、同じことを繰り返すことしかできない人間の愚かさや愛しさそのものである気がした。

「昔はここでよく妻を待ったもんだ。今なら分かる。人を待つのがどれほど幸せなこと

か。今じゃわしにはもう待つ人なんて誰もおらんのだよ」

皺だらけの老人は艶のいい唇を広げて微笑んだ。そして幸せをもう一杯頼もうと言つて、給仕を呼んだ。出されたオニオンスープは温かく、アデリーヌの胃袋を優しく満たしてくれた。ハーブとフルーツの入り混じったベルギービールの後を引く甘味と共に、老人の饒舌な助言が胃の中にまで入ってきたように感じた。店の猫らしき美しい毛並みをしたシヤムが二人の椅子の間に入ってきた。ベルナルの太い手がシヤムの背中をなでると、シヤムは目を細めて体を弓なりにくねらせた。やはり魔法の手であった。

アデリーヌは真夜中に目が覚めた。夜中に目覚めるのは久し振りのことだった。今まで見ていた夢の色彩が一瞬で失われ、濃密な闇がアデリーヌの瞳に押し掛かっていた。いつ眠ってしまったのかは覚えていない。アパルトマンには静寂が満ちていた。アデリーヌは深い森の中で今死のうとしている鳥のことを考えた。今まさに、この世界のどこ

か。もう何年も眠っていた気さえする。頭が重かった。全てが夢なのではないかと思つたが、徐々に昨日までに起きた出来事が頭の中で繰り返された。数時間前にベルナールと飲んだビールの微かな芳香が部屋の闇に溶け込んでいる気がした。不意に自分の身体がどうしようもなく無力で醜いものだと感じた。生きていながら、どうすることもできない自分の存在を消してしまいたかった。黒い怪物がベッドのすぐ横でこちらを見ていた。アデリー又は震えながら目を閉じた。目を閉じても恐怖は消えなかった。子供の頃に感じた原始的な恐怖を思い出す。真夜中に目が覚めると一生涯はやつてこず、変化のない闇の中に一人取り残される。そう信じていたのだ。そのとき不意に、バ―で言っていたベルナルの言葉が思い浮かんだ。その言葉は頭の重みと同じように宙に浮いたまま離れなかった。

アデリー又はベッドから勢いよく起き上がり、冷たい床を歩いて窓のカーテンを開けた。レールの擦れる音がいやに大きく響き、誰かに自分の存在を知られるのではないか

と思つて反射的に手を引つ込めた。向かいのアパルトマンは青い夜の中で沈黙していた。動くものは何もない。アデリー又は身体の奥底に広がり続ける闇を感じ、両手で自分の腕を強く押さえつけた。パリは永遠に人通りの絶えた廃墟のようだった。アパルトマンの上に星が瞬いている。アデリー又はワンピースの上にジャケットを着て外へ出た。

真夜中のパリは静まり返っていた。宇宙全体が静止したかのような静寂が支配し、生き物だけでなく時間までもが息を潜めているかのようにだった。ただ通りに立つ街灯だけが眠るパリの穏かな寝息のように暖かな光を地面に落としていた。石畳を歩く足音や息遣いが頭の中にまで響き、世界全体が自分の意識の中に取り込まれていく。今向かおうとしている目的地までの道のりがいやに遠くどこまでも続くように感じられ、あたかも作り物のパリの中を歩いているような気分になつた。私は演劇の中で自分自身を演じているのではないかしら。生まれてから今までずっと。アデリー又はそう思いながら、闇夜の通りを歩いた。時折光る車のヘッドライトさえも舞台を照らす

照明のようだった。

セーヌ河は黒一色に染まっていた。時が永遠に止まってしまったかのようなポン・ヌフを渡り始めると、アデリーヌの心臓は鳩の喉のように鳴り出した。まるで世界中に響き渡るような音だった。この橋へ来るのは久し振りだった。真夜中にポン・ヌフにいることが信じられなかった。いつもなら布団を被りこの世の終わりがやってくるのをただ怯えながら待っている自分が、こうやって一人で夜中に外出することなどありえないことだった。アデリーヌは真夜中に橋が存在することに新鮮な驚きを感じていた。この橋が存在するなら、シテ島にあるドフィーヌ広場も存在するはずだと思った。そして今からそこに入ろうとしている自分自身も。

果たしてドフィーヌ広場は館の向こうにあった。真夜中の広場は昼間以上の静けさに支配され、周囲の街灯のオレンジ色の光が暗い広場に浮かび上がっていた。広場にはもちろん誰もいなかった。アデリーヌはいつも座っていたベンチへゆっくりと歩いていった。

濃い緑色のベンチは沈黙の中で、舞台の小道具のように街灯の明りに照らし出されている。まるで昔からアデリーヌが来るのを待っていたかのようだった。私は今、舞台の上にいる。スポットライトを浴びたベンチの周りには、闇に隠れた観客たちが息を潜めて見つめているのよ。そんな空想に耽りながらアデリーヌはベンチに座った。ベンチは冷えていた。急に夜の冷気を思い出した。アデリーヌはマフラーを首に巻き直した。こんな時間に人気のない広場にいること自体、おかしいことであった。

「私は今なにをしているのだろう」

誰もいないドフィーヌ広場まで何をしにきたのか、アデリーヌは急に分からなくなった。両手をベンチに触れると冷たく、でこぼことしたペンキの凹凸を感じ取れた。そのときアデリーヌの指に何かが当たった。目を落とすと、背もたれの間には小さな紙切れのようなものが挟まっていた。アデリーヌは擦り切れた横木の間からその紙切れを取り出した。それは何枚かに折られていた。アデリーヌは街灯の下でそれを開いた。

へリングをくれたアデリーヌへ 君にもう一度会いたい。午前零時にポン・デ・ザールで待つ ガストン

興奮していたため意味が読み取れず、アデリーヌは震える手の中でその文面を何回も読み直した。その紙に日付は書いていなかった。果たしてその待ち合わせの日が今日なのかアデリーヌには分からなかった。ジャケットの袖をまくって時計を見ようとしたが、腕時計は持ってきていなかった。飛び跳ねるようにしてベンチから立ち上がると、広場を囲むアパルトマンの一階にある商店に駆け寄った。紅茶店の暗いショーウィンドウの中を目を凝らして覗く。かすかに時計の針が一時二十分を指すのが見えた。すでに一時間二十分が過ぎていた。

アデリーヌはドフィーヌ広場を出て館の間を走り抜けた。車の往来の途絶えたポン・ヌフを横切り、石の欄干にへばりついた。黒いセーヌ河の向こうにポン・デ・ザールが見える。橋の上には何も見えない。隣の橋までの距離は遠くはなかった。しかしアデリ

ーヌにとってそれはとても長く果てしない距離に見えた。アデリーヌはポン・ヌフの上を走って右岸に渡った。闇の中に浮かび上がるポン・ヌフ駅のメトロはすでにシャッターが下りている。数年前に閉鎖してしまったサマリテーヌデパートの看板が闇の中で白く光っていた。よきサマリア人の灯火に見守られながら海底を泳ぐのよ。アデリーヌは深海を巡る魚のようにルーヴル河岸をポン・デ・ザール目指して走り続けた。そうだった。アデリーヌは泳いでいるのだった。今までずっと、人生という止まることのない川の中を。遙か遠くの下流に、ゆっくりと泳ぐベルナルの尾ひれが見えたような気がした。数時間前までアデリーヌはたった一人でこの孤独な世界にいたのだと思っていた。しかし一時間以上も前から自分のことを待っている人がこの世界にいたのだった。巨大な岩のようなルーヴル美術館が闇夜の中に迫ってくる。これが現実だとは思えなかった。まるで夢の続きを駆け抜けているような気がした。しかし、視界の左にはすでに、向かうべき橋の姿がしっかりと見えていた。

石段を上ってポン・デ・ザールについたとき、まず目に飛び込んできたのは対岸に聳えるフランス学士院の姿だった。その荘厳な青い丸天井は夜の闇の中でもくつきりと夜空との境目を作り出していた。フランス学士院を背景にして、木製の橋の上にベンチが見えた。中央のベンチに誰かが座っている。アデリーヌは信じられぬ思いで、橋の中央まで歩いていった。それはドフィーヌ広場に倒れていた男だった。ガストンはベンチに座ってセーヌ下流を眺めていた。まるで人生の先にある何かを見つめているかのように。

「ガストン」

橋の上にアデリーヌの声が響いた。パリ中が息を潜めてその声を聞いているかのような静寂が続いた。ガストンが振り向いた。アデリーヌの姿を見たガストンは、しばらくの間声を出さずにアデリーヌを見つめていた。しばらくして言葉を思い出したかのように、「やあ」

と言って微笑んだ。アデリーヌはなんとさえよいか分からず、ただ橋の上で立ち尽

くしていた。彼は前に会ったときのような格好ではなく、黒い上等そうなコートを着込んでいた。年季の入ったスニーカーも革靴に変わっていた。ジーンズだけがあのときと変わらないように見えた。ガストンはベンチの空いている場所を手で示した。アデリー又は少々ためらいながら隣へ座った。背もたれのない木製のベンチは、川に浮かぶ小船の床板のように見えた。

「もう来ないかと思ったよ」

「だって、さつき気づいたの」

アデリー又はそう言った。声は震えていたが、喉の奥にある鉛は消えていた。アデリー又はガストンと自然に会話をしていることに驚いた。まだ一度しか会ったことがなく、しかも会話をしたのはほんの十分程度のことだったのに。まるでいつもと同じ待ち合わせ場所に集まった二人のように、その会話は今までしたどんな言葉よりも自然なものに感じた。言葉は白い息とともに二人の間に浮かび上がり、消えていった。天使が通

り過ぎた。この言葉の後に一体何かがあるのか、アデリーヌには想像もできなかった。

「ここで待ち合わせしたかったんだ。真夜中の誰もいない橋の上で」

歩行者専用の木の橋の上にはアデリーヌとガストン以外誰もいなかった。以前通ったときは大勢の学生やホームレスが橋の上で騒いでいた。あのときアデリーヌには、橋がまるで孤独な自分を拒絶しているようにさえ思えた。しかし今、真夜中の芸術橋は二人が再会するためだけにあるような気がした。

「置き手紙を書いたのは初めてだ。しかも、誰がいつ受け取るかも分からない。でも、何も書かれていない白い紙に文字を書けば、それが実現する気がしたんだ。まるで魔法の言葉みたいに」

魔法はかなくなった。二人は真夜中の橋の上で再会した。二人の乗った橋が揺れている気がした。この橋にいと、あてもない旅に出る小さな手漕ぎ船に乗っているように感じられた。

「写真を見たわ」

そう言ってアデリー又はガストンを見た。ガストンの瞳が地上からの光に照らされた深い洞窟の底のように一瞬輝いた。しかしガストンの瞳は再び闇の中に沈んだ。彼はセー又の下流の遙か彼方を見つめているかのようだった。橋上の街灯に照らされて、ガストンの鼻梁が白く縁取られていた。

「君が初めてだった。このパリで僕がいることに気づいてくれたのは。一年前、ブルゴーニユの田舎町から写真家になるためにパリにやってきた。大道芸人や路上アーティストに交じって、地元で撮った写真を道端で売った。でも誰一人僕の写真を見てくれる人はいなかったよ。学校のクラスでだれも自分に関心を持つてくれなかったように。小さい頃から好きなのは写真と読書だけ。ずっと一人だった。そして、将来どうしたらいいかも分からなかった。でも、パリに来ればなんとかなると思った」

ガストンは自分に言い聞かせるかのようにゆっくりと話した。もう一人の自分がここに

いた。アデリー又は砂漠のようなパリの中で、不完全な自分を埋めてくれる欠片をようやく見つけた気がした。

「僕はパリで写真を撮り始めた。でも間違いだった。そこに映し出される風景は僕には無関係で、僕は自分が透明人間なんじゃないかと思った。僕が広場で倒れていたときも、僕に気づく人は誰もいなかった。君を除いては。君がリンゴをくれた日、僕は死のうとしていたのかもしれない。職もなく金もなく、自分がどんな写真を撮りたいかも見失っていた。実はそのときアパルトマンから追い出され、パリ市庁舎裏の安い学生宿舍に泊まっていたんだ。もう生活していける状態じゃなかったんだ」

エツフェル塔は闇に沈んで見えなかった。ガストンは話を続けた。

「でも君に出会った次の日、君にまた会いたくてドフィーヌ広場へ行つたんだ。君がまた仕事場へ行く途中に通りかかる気がして。果たして君はやってきた。まるで失われた映画のフィルムを巻き戻したみたいに。そして君の姿を遠くから見た途端、どうしても君

の写真を撮りたくなつた。そして、気づかれないように遠くから君を撮つた。君がただそこに存在することが美しいと思つたんだ。それを残したいと思つた。その美しさを撮るためには、君に知られてはいけなかつた。それから毎日、僕は遠くからドフイー又広場にやつてくる君をこつそりと記録した。アンリ四世ホテルの影から、広場に面したカフェの二階から」

「でも、私は許可したつもりはないわ」

「君に迷惑をかけたのなら謝りたい。でも、君の写真を撮ることは僕自身の使命のようになさへ感じたんだ。そして撮つた写真を現像して君に見せようと思つた。けど、ある日之境に君は広場に姿を見せなくなつた。僕は現像した写真をファイルに入れて写真を展示してくれるギャラリーを回つた。ほとんどのところで断られた。けどサン・ジェルマンのギャラリーが写真を気に入ってくれた。全ての写真の現像代と展示料金を前借りさせてくれた。宿代を払い終わると、もう自分の手元にお金はほとんどなかつた。

たまたまスーパーで見つけた。パン屋の求人広告の番号に電話して、十六区にあるパン屋で短期アルバイトをしていたんだ。朝は早かったけれど、昼間と夜に写真を撮ることができた。バゲットは毎日無料で食べられたし、焼きたてのクロワッサンは最高だった。一カ月後、ようやくまとまったお金が入り、この前ギャラリーのマドモワゼルにお金を渡してきた。そうしたらギャラリーに写真のモデルになった女の子が来たと教えてくれた。そのとき僕は思ったんだ。パリにいる限り君にまた会える、と。ドフィーヌ広場は僕にとつて魔法の場所だよ。また君に会うことができると信じられる場所。僕はすぐにドフィーヌ広場に戻り、手紙を残した」

そう言ってガストンは立ち上がり、おどけた表情で手を広げてアデリーヌの前に立った。

「少しはましになっただろう？」

アデリーヌは黒いコートを着たガストンを見つめた。街灯の明りの下で、ガストンの細い

シルエットが劇中の人物のように浮かび上がった。気がつくやアデリーヌは微笑んでいた。

「写真はよかったわ」

「本当かい？」

ガストンは急に真剣な表情になってアデリーヌを見た。

「でもびっくりした。一瞬何が起こったのか分からなかった。私が写っていたから」

ガストンはアデリーヌに近づき、橋に片方の膝をついてアデリーヌの手をつかんだ。その行為にアデリーヌは一瞬びっくりしたが、ガストンの手は温かく心地よかった。自分の手が震えていないかアデリーヌは心配になった。

「そうさ、君は今ここにいるんだよ」

今いる木製の橋が急に動いたような気がして、アデリーヌは両足に力を入れて地面を踏みしめた。

「君がもし地球で最後の人間だったとしたら、君はこの世界で何をする？」

ガストンは橋に片膝をついたまま、ベンチに座るアデリーヌを見つめていた。アデリーヌは答えに窮したまま、震える瞳でガストンの純粹な視線の奥を見た。

「何も。することなんて残っていないわ」

「いや、違う。君はそれでも地球のどこかにいる人間を探さだろう。誰だってそんな欲望を持っている。しかしこの人のごったがえすパリで、みんなそのことを忘れてしまっている。何かを考えたり日常の隙間に忘れたものを見つける暇もなく、時間だけがパリの石畳をすり減らしていくんだ」

そう言つてガストンは立ち上がると、コートの中からライ麦パンと赤ワインの小瓶を取り出した。

「地元のワインなんだ。誰かと喜びを分かち合うときまでとっておいた」

パンはすでにスライスされていた。二人でパンを食べ、ワインを飲んだ。それは二人にとつ

て、一緒に食べる初めての食事だった。パンの程よい酸味がアデリーヌの心を落ち着かせた。

簡素な食事を終えたとき、アデリーヌは今全てが心地よく満たされていることを知った。そしてガストンの肩に頬を寄せたとき、微かな小麦粉の匂いがした。もし誰かがここにいて二人を遠くから撮影したとしたら、そこに何が映っているのだろうか。夢なら醒めないでほしい。アデリーヌはそう思いながら、橋の床の地面を強く踏みしめた。その夜、アデリーヌは世界を発見した。たまたまそこはボン・デ・ザールの上だった。隣にはたまたまガストンという青年がいた。二人は今日というパリの終わりに出会った地上で最後の二人だった。セーヌは流れていた。二匹の魚を乗せて。しばらくしてアデリーヌはガストンの肩の上で眠りに落ちた。

目が覚めると、目の前に広大な大河のようなセーヌの流れがあった。黒かった河は

仄かな群青色に変化し、朝霧の中に昨夜は見えなかつたエツフェル塔が霞んで見えた。寒さは感じなかつた。隣にはガストンがいた。彼はすでに起き、目を細めてエツフェル塔の方角を眺めていた。

「もうすぐ夜明けだよ」

二人は反対側のベンチに座り直し、まだ暗いシテ島を眺めた。東の空が薄紫色になり始めると、暗闇に沈んでいたセーヌの流れに穏かな光が差し始めた。次第にパリ全体が現実の今日に到達する前のセピア色の光に包まれた。燃え上がるような赤い光を宿した太陽は未だシテ島のシルエットの向こうに潜んでいたが、空は驚くほど赤く染まっていた。二人はベンチに座ったまま、その光景を眺めていた。セーヌ上流を眺めながら、アデリーヌは今まで辿ってきた自分の人生を想った。どこへ行けばいいのかも分からずパリを彷徨っていた自分がようやく見つけたのがこの橋のベンチなのだった。太陽が昇ると、二人のいるポン・デ・ザールが世界に発見された最初の場所のように照らし出され

た。二人にとって、初めての朝がやってきた。それはまさに、アデリーヌにとって人生の夜明けだった。

次に会う約束をした翌日まで、アデリーヌは落ちつかなかった。仕事が始まると、アデリーヌは逆らうことのできない日常の波の中にもまれていった。図書館で仕事をしながら、アデリーヌは再び不安に襲われた。誰かと待ち合わせをすることを、アデリーヌは極度に恐れていた。あの高校時代の一件以来、誰かと待ち合わせをしても誰もそこに来ないのではないかという思いがアデリーヌの心を支配していた。また幸せな出来事を疑ってかかる性格も昔のままだった。ガストンの目の中に見えた光は束の間の影に過ぎない。昨夜の出来事は全て嘘だったのではないかしら。ドフィーヌ広場にあった手紙もガストンの身体から漂ってきた小麦粉の香りも。そう思うとアデリーヌは、あの完全に孤独であったとき以上の不安に襲われるのだった。

仕事が終わわり、アデリーヌは約束の場所へ歩き出した。ルナール通りを南に向かって

歩くと、パリ市庁舎の手前にオテル・ドゥ・ヴィルのメトロが見えた。以前二人の子供を探しにオーレリーと走つてくぐり抜けたメトロだった。アデリーヌはメトロを通り過ぎ、ルナル通りの横断歩道を渡った。そして著名人の立像が立ち並ぶ豪華なパリ市庁舎を右に見ながら、リヴォリ通りをバステューユ方面に向かつて歩いた。

アデリーヌの不安は杞憂に終わった。次の待ち合わせ場所だったサン・ポールのメトロ出口にガストンは立っていた。まるで絵の中の人物のように、ずっとそこにいたかのよう。夕暮れのリヴォリ通りは人で埋まっていたが、アデリーヌはすぐにガストンの姿を見つけることができた。普段は街の風景の中のどこか一点に目を向けることはなかった。しかし今、雑多な風景の中にいる一人の男を見つけることができるのだった。ガストンの柔らかな笑顔はアデリーヌの不安をかき消してくれた。二人が再会したことが、異国の地でもう一人の自分に出会ったかのような夢想的な出来事に思えた。二人は互いの頬に二回ずつキスをしあった。それからサン・ポール通りに面した小さいビストロ

に入った。

「たまに来る店なんだ。値段は良心的で居心地のいい店なんだよ」

レストランに入ること自体久し振りだった。いつもの恐怖症が蘇ったが、給仕は穏かな笑顔で私たち二人を奥の席へと迎えてくれた。アデリーヌが男性と二人でいることがさも当然のように。私の姿はいつもと違うように見えているのだろうか。アデリーヌは自分自身が全く別の人間を演じているかのような不思議な気持ちになった。店内は小さく、居心地がよかった。隣の席では白髪の老夫婦が静かに肉料理を食べていた。テーブルは柔らかな光に包まれ、全てが心地よく動いていた。

食後、二人はマリー橋を渡ってサン・ルイ島を歩いた。島の中央を横切る通りは中世の闇に包まれていた。闇の中にフォア・グラ専門店やアイスクリーム屋、時計店の看板が閉じた絵本の世界のように寂しそうに浮かんでいた。白く光るサン・ルイ橋まで来ると、対岸に黄金に輝くパリ市庁舎が見えた。二人は橋の中央で立ち止まった。

「パリは綺麗だ。でもなんでだろう。この街にいと無力感を感じるよ」

アデリーヌははっとして、市庁舎を眺めるガストンの横顔を見つめた。

「パリはあまりに美しいのに、僕はそれと何の関係もないんだ」

天界からパリを見る天使のように、ガストンの瞳は悲しく揺れていた。煌々と光を放つ遊覧船が横切り、対岸の壁を演劇の舞台のように照らした。数秒間、河岸のベンチに座っていた男が光に包まれ、そして緞帳が下りるかのように男の姿が再び闇に沈んでいった。

「美しい瞬間を撮りながら、それを快感に思っている自分自身は無様な影に過ぎない。自分がそのまま石畳の上で消えてしまってもおかしくない」

二人の孤独はあまりに対照的だった。アデリーヌは世界を閉じて不安に感じ、ガストンは世界を開き美しく感じていた。しかしそれゆえ、二人は誰よりも透명한孤独者だった。アデリーヌはガストンの手をとった。ガストンの手はひどく冷えていた。

「大丈夫、あなたはここにいるわ」

ガストンはアデリーヌを見た。その言葉はガストンに向けて言ったはずだが、それは自分自身の内部に強く跳ね返り、身体の底にゆっくりと沈殿していった。二人はお互いの瞳に宿る孤独な星を見つめ合った。そして二人はキスをした。アデリーヌにとって、男の人と唇を重ねるのは初めてのことだった。二人は互いの孤独を吸い取るかのように深く長いキスを交わした。そして互いの存在を確かめ合うかのように、抱きしめ合った。

「新しいアパルトマンは決まったの？」

このすぐ近くだよ、とガストンは言った。二人がいるのはセーヌに浮かぶ二つの島をつなぐ橋の上だった。

「こんな観光地に？ 聖堂と高級住宅しかないわ」

ガストンは何も言わなかった。しばらくして、ガストンはシテ島側に向かって歩き出した。

サン・ルイ島の美しい夜景を背にして、二人はシテ島を抜けて左岸のモンテペロ河岸に渡った。石段を降りて黒いセーヌ河の真横を歩いた。しばらくすると暗闇の中にゆらゆらと揺れる黒い影が見えた。

「ここが僕の家さ」

二人は立ち止まった。そこはセーヌに浮かぶ船宿だった。シエイクスピア書店の黒板に貼ってあった空き部屋の広告で見つけたんだ。敷金もなし。ガストンはそう言って微笑んだ。観光地の中心にありながら、ここはどこからも遠く離れた孤独な宇宙の果てのように思えた。黒い波が揺れ、まるで時の流れの最後に行きついた、停滞した永遠の淀みのようであった。

「イギリスから来た男と相部屋なんだ。今夜だけ出ていってもらおうか？」

「こんな寒い夜に？そんなの可愛そうよ」

じゃあ僕たちはどこへ行けばいい？黒いセーヌ河に浮かぶ侘びしげな船を見ていると、

アデリーヌは今いる。パリがどこまでも果てしなく続く暗い孤海のように感じられた。二人はどこへもつけずに漂流する流浪民のようだった。パリはこんなに美しいのに、行く場所などどこへもない。夜にガストンがこの船宿の中で寝ている姿をアデリーヌは想像した。それはすぐに暗い井戸の底で眠るアデリーヌ自身の姿となった。

レピュブリックのアパルトマンに着いたとき、すでに夜の十時を過ぎていた。管理人のマダムはもう寝ているだろう。巨大イグアナは数日前に完治していた。エレベーターが下りてくるのを待ちながら、二人は見つめあい、そしてキスをした。イグアナのげつぷと共にエレベーターが地上に到着すると、二人は唇を重ねたまま中へと雪崩れ込んだ。今まで、何故私は幸せにはなれないのかとアデリーヌは思っていた。しかし気づいていないだけだった。産まれたばかりの私の泣き顔を見たときの母の笑顔、放課後に母親が作ってくれたシヨソン・オ・ポムの待ちきれない香り、公園で鳩を追いかけて駆けたときの

頬に触れる柔らかな空気。あらゆる幸せな瞬間があつたはずだ。エレベーターが上昇すると同時に、アデリーヌの身体は過去へと遡っていった。今まで忘れていた幸せな瞬間の数々を思い出し、そして思い出すことさえできない幼年期のある神秘的な感覚を、アデリーヌは今ガストンの温かな唇の中に感じていた。

闇の中に落ちていくアパルトマンは静かだった。まるで月夜に照らされた浜辺のような静けさが寝室の隅々にまで満ちていた。その静寂の中で仄かなリンゴの酸味とマツの木の香りが薄闇の中に漂い、それは宇宙がひっそりと吐き出す甘美な呼吸のように感じられた。それらが二人の呼吸と交じり合い、互いの五感は徐々に宇宙の襞に包まれていく。アデリーヌの肌は幾億年の海水にさらされた砂のように湿り気を帯び、その中に熱いマグマのような血が流れていた。アデリーヌは冷たいベッドの上でガストンの温かな腕の躍動に触れ、そこに確かに存在する肉体の熱さに震えた。今ここに、それはある。二人は無言のまま互いの身体を激しく求め合った。このような底知れない欲

望が自分の身体のどこにあったのだろう。時が止まったかのような静寂の中で、アデリー又は不安と快感を同時に味わった。ここにいるのがアデリーだけでは、ガストンは自分の欠けた一部としてすでに吸収されてしまったのではないか、もしくは自分がガストンの一部としてすでに消えてしまったのではないかと思った。アデリー又はもう一人の自分に呼びかけるかのように、小さくガストンの名を呼んだ。しばらくして返事があった。それはまるで何光年も離れた星同士の会話のようだった。

「お願い、言つて。私は、ここに、いると」

ガストンはその言葉をゆつくりと口にした。

「君は、ここに、いる」

何光年も先から届いたその単純な三語は、アデリー又は肉体を貫き、彼女の透明な身体に深く沁み込んでいった。アデリー又はガストンの身体の重みを感じながら、身体が月に向かって浮かんでいくのを感じた。まるで互いの背中に透明な羽が生えたかのよ

うだった。身体を支配していた重力が一瞬にして消え、存在するのは二人の触れる肌の湿り気とその周りに広がる無限の闇だけ。そしてさらに濃密な闇がアデリーヌの瞳に映り、ずっと感じてきた耐え難い恐怖が初めてアデリーヌの中から消えていった。天使の偉大な黄金の槍が、何度もアデリーヌの肉体を突き刺し、彼女の顔は今までに味わったことのない甘美さで燃え上がった。遠くに浮かぶ星の孤独を感じられるほど強く烈しく。しばらくして、二人の小さい身体は束の間の深い眠りに落ちた。

アデリーヌは目が覚めた瞬間、世界が始まっていることを感じた。隣にはガストンが眠っていた。夜明けの光は全ての色を輝かせ、全ての存在がいかに美しいかを気づかせてくれた。怪物はいつの間にか消えていた。まるで最初からいなかったかのように。

今までの人生は、ガストンに出会うまでの序章だったのだろうか。二人が再会して一週間が経った今も、アデリー又は未だに信じられない思いで日々の生活を送っていた。ポンピドゥー・センターでの仕事も順調にいつていた。ロートル・カフェには仕事へ行く前によく出かけた。店の本棚に置いてあるパトリック・モディアノの新作はすでに読んでしまった。リングはまだ箱の中にいくつか残っていた。

二人は時間を見つけてはパリの街を歩き回った。ポンピドゥー・センターの定休日である火曜日の昼には、リュクサンブール公園やセーヌ河川敷を散策し、写真専門の書店に行つて写真集を探したりした。サクレ・クール寺院のあるモンマルトルの丘に上り、大海原のようなパリを眺めた。ずっと行つてなかった映画も観に行つた。日本料理レストラン(ヘトヨトミン)で初めてスシを食べた。まるで初めてパリの街にやってきた旅行者の気分

だった。再会した日の夜のようにレストランで食事をすることはほとんどなかった。二人にはそんなお金の余裕はなかった。だから夜は無料でワインやサンドイッチにありつけるヴェルニサージュを巡った。パリでは毎日のようにどこかのギャラリーで新しい展示が行われていた。アフリカンアートと中国人によるカリグラフィアートが盛んだった。ヴェルニサージュは主にボブル地区とサン・ジェルマン地区のギャラリーで開催され、展示会場でワインを飲み作品について語り合った。多くの新進芸術家が集まるパーティーへ行くこと自体刺激的で、数週間前のアデリーヌであれば中に入ることさえできなかったが、今ではそのような場所で作品を見ることに喜びさえ感じていた。朝はパン屋でバゲットとパン・オ・シヨクラを買ってアデリーヌのアパルトマンで食べたり、天気の良い日はセーヌ河岸に腰を下ろして新鮮な空気の中でクロワッサンを頬張った。河辺ではクロワッサンの欠片が石畳に落ち、風に吹かれて飛ばされ、それを鳩が追いかけていった。二人の本の趣味は異なったが、お互いに読んだ本の感想をロートル・カフェで言い合った。

二人はお金がなかったが、それで十分だった。毎日が今までの孤独な十数年を埋めるかのような密度で過ぎていった。

ある日、二人はヴェール・ガラン公園でお互いの過去を話し合った。ここはアデリーヌがポン・ヌフを渡るときにいつも見ていたシテ島の先端にある公園だった。スクリーンの中の遠い世界だったこの公園にアデリーヌはようやく入ることができた。二人で西日の当たる石畳に座り、セーヌ下流を眺めた。時間はたっぷりあった。夕暮れが徐々に迫り、二人はその微細な変化を楽しんだ。そして柳の木の下の石畳に寝転びながら、気が付くと二人は過去へと遡る船に乗っていた。アデリーヌはノルマンディーのカルヴァドス県出身、ガストンはブルゴーニュ地方のコート・ドール県出身。アデリーヌはカルヴァドスとシードルを作るリンゴ畑のある美しい村で育ち、ガストンはワインの産地である黄金に輝くブドウの丘で育った。二人の生まれた場所は全く違ふところだった。しかし二人ともパリを夢見てやってきた人間同士であることに変わりはない。そしてパ

りに美しさを感じながら孤独と絶望を抱いていたことも。

「僕は一年前にパリにやって来た。僕の田舎はセーヌの源泉にあるから、文字通り川下りさ。最初はエッフェル塔の見える十七区のアパルトマンに住んでいた。といつても、パリの外れだよ。一番上の狭い屋根裏部屋だった。そこから見えるこの塔はとても小さく遠かった。夜に光るエッフェル塔を見るとね、まるで宇宙の果てから地球の青を見ているような、なんとも言いようもない寂しさに襲われた。田舎にいたときよりパリが遠く感じられたくらいさ。ひどい寒さと孤独で、まるで少しずつ死んでいくような気分だった。朝はヨーグルトとミルクパンで簡単な食事をし、遙か遠くに見えるエッフェル塔を眺めながら歯磨きをした。この塔の存在だけが唯一自分と世界をつなぎとめてくれるものだと思じてね」

セーヌから吹く風を受けながらガストンは話し続けた。写真が売れず、その宇宙の果てのようなアパルトマンからも出なければならなくなつたこと。野宿をしたり学生宿に

泊まりながらパリで写真を撮り続けてきた今までの生活を。

「今は君がいる。ギャラリーで写真を展示することもできた。長い闇のトンネルを抜けて、やっとここまでこれた。あれはリングゴ以上のものだったよ、アデリーヌ。空腹だけでなく、この世界に僕が今いることを気づかせてくれたんだ。僕は孤独な宇宙の果てで、君を見つけた」

「私もよ、ガストン」

アデリーヌはガストンにリングゴの真実について聞こうとした。ちょうどそのとき、観光船が通りかかった。闇に沈んだ公園に溢れんばかりの光が降り注ぐ中で二人は上半身を起こし、まるで警察に見つかった脱獄犯のように目を細めた。二人は見つめあい、そして笑った。数ヶ国語の賑やかなアナウンスが聞こえてくる。今まで逃げ惑っていた自分は何だったのだろう。アデリーヌは左手でガストンの右頬を包み、キスをした。とても長い間、二人は互いの息を吸い込み、光の洪水が去った後もその甘美に身を委ねてい

た。お互いに、ようやく見つけた自分の破片を慈しむように抱き合った。広い宇宙の中で今二人はパリにいた。分かれたセーヌが合流するこの公園の先端で、行き場の失っていた二人の人生も合流し一つとなり、それが行くべき地平線に向かって流れ出す予感をアデリーヌは感じていた。二人は近いうちに一緒に住むことになるのだろうか。小さなホームパーティーをアパルトマンで開き、友人を招待したりするのだろうか。そして一緒に全てを語り悩み、それを乗り越えていくのだろうか。今まで他人と接することを拒み続けてきたアデリーヌにとって、その先の下流に何があるのかは見当もつかなかった。どんな小説よりも結末の分からない未知の物語だった。

イザベルに再会したのは、ガストンと二人でヴェルニサーージュに出かけたときのことだった。それはロシアの画家の絵を展示したギャラリーで、オルセー美術館に近い左岸のリニヴェルシテ通りにあった。

「久し振りね」

実際に会うのはサン・マルタン運河のギャラリー以来で、三人が揃うのは初めてのことだった。ガストンはイザベルと軽く頬を合わせて挨拶した。彼女はル・ボン・マルシエで買い物をしてきた帰りだと言った。日本の音に関する展示会をやっていたと言って、伝統的な移動豆腐売りの吹く喇叭の音がすばらしいと目を輝かせた。混雑するデパート内でヘッドフォンを聞きながら、遙か遠くの東洋の音色に耳を済ませるイザベルの姿を想像した。ガストンがギャラリーの様子を聞いた。

「一日に二十人くらいかしら。あそこは人通りは多いけど、中に入ってまで見る人は稀ね。皆写真に飽き飽きしているのよ。誰にでも撮れる絵の代わりだと思っている人が多いのね。それに最近は似たようなつまらない写真が多いから」

ガストンとイザベルは写真の話が続けた。アデリー又は一人取り残された。スタッフが色とりどりのマカロンをテーブルに運んでいる。壁一面に飾られたロシア画家の絵は幻想的な絵本の挿絵のようであり、奇妙に倦怠的な美しさがあった。アデリー又は絵の中の北欧的な少女の表情に親しさを覚えた。自分の好きなシャガールの絵にどこか似ていたせいかもしれない。暗いトーンの風景の中をワインや少女や猫が縦横無尽に飛び回っている。

「この絵いいわね」

気がつくといザベルが隣に来ていた。ガストンの姿は見えなかった。二人はしばらくの間、目の前の絵を見つめていたが、アデリー又は何故か落ち着かなかった。

「ガストンの写真を展示できて、私嬉しいのよ」

イザベルのギャラリーに展示されたモノクロの自分の姿が目に見えかんだ。逃げるようにギャラリーを出たあるときから長い時間が経ったように思えたが、実際は一ヶ月ほどしか経っていなかった。しかしすでに数枚の写真が売れたのだった。イザベルのギャラリーはサン・ジェルマンの知識人の間でも有名だった。ガストンの写真展示は来月までだとイザベルは言った。それまでに全ての写真に買い手がつくことをガストンは願っていた。ガストンが今後生活していけるかは、イザベルの力に依るところが大きかった。

「写真家は素晴らしいわね」

イザベルはもしかしたらすでに自分とガストンのことを知っているのかもしれない。ガストンはそれについてイザベルに話したのだろうか。

「フランスが発明したのは自由だけじゃない」

イザベルはアデリーヌを翡翠のような美しい瞳でじっと見つめた。まるでアデリーヌの

瞳の中に答が隠されているかのように。

「そう、写真よ。そしてフランスで生まれた写真は、肉体を再発見したのよ。写真家が近くにいるというのは、常に自分を発見する機会に恵まれるってことなのかもしれない」

そのときガストンが戻ってきた。会話は一瞬途切れ、そして川のようにまた流れ出した。三人でロシア画家の絵について話し合い、それからシャンパーニュを飲みながら宝石のようなマカロンをつまんだ。しかし話の内容は思い出せず、イザベルの瞳に宿る成熟した翡翠の輝きだけがアデリーヌの目にいつまでも消えずに残っていた。

その夜、アデリーヌは初めてガストンの部屋を訪れた。セーヌに浮かぶ船宿の中は忘却へと向かう淡い記憶の断片のようだった。一緒に住んでいたイギリス人の青年はすでに他の住居に移って行ったあとだった。

「彼は薬の売人だった。最近では自殺用の毒薬も売っていたらしい。パリにはいろんな商売をしている奴がいるよ」

「あなたもね。写真ほど危険な商売もないわ」

二人は笑った。ちよつと待つててと言いながら、ガストンは隣の部屋へ入つていった。アデリーヌは一人取り残された。ほぼ正方形の部屋にはベッドが二つあるだけで、黄色い間接照明の灯る室内はがらんとしていた。

「毒入りじゃないから安心して」

ガストンがポウルに入ったコーヒーを差し出した。アデリーヌは微笑んで受け取った。コーヒーを飲みながら、ガストンはアデリーヌに様々な写真コレクションを見せてくれた。それは主に。パリのパッサージュにあるポストカードショップやクリニャンクルの蚤の市で集めた古写真で、中にはステレオカードという立体的に見える写真もあった。同じ写真を一枚の板に二枚載せたもので、ステレオスコープという道具で見ると、まるで3D

映画のような臨場感あふれる写真の世界が楽しめた。ナイアガラの滝のステレオカードをその道具を通してみると、滝が落ちる水の量感が目に見えるようだった。昔見た絵本のようにアデリー又は笑いながら写真を楽しんだ。最後にガストンは、いつも使っているバッグの中から小さな黒い聖書のようなものを取り出した。こげ茶色の皮でできたその表面には紋章のようなエンボスが刻まれている。表面はモロッコ革のようでもあり、揺らめく波の表面のような皺がよっていた。アデリー又はオデオンの古書店で働いていたときの美しい本たちを思い出した。ガストンは黙ったまま小さな留め金を外して開いた。それは本ではなかった。中からは古い肖像写真が出てきた。そこには正面を見つめている女性が写っていた。

「僕の先祖だよ。祖母のまた祖母。これはタゲレオタイプといってね。百五十年くらい前の写真なんだ」

これに似た写真は古書店主のセルジュに連れられて行ったクリニャンクルの蚤の市で

見たことがあった。蚤の市の奥にある写真専門のアンティークショップで、たくさんの無名の肖像写真がポストカードに交じって売られていた。百年以上前の古い肖像写真の束に妙な興奮を覚えたことを思い出す。今ガストンの手にある写真もそれと同じようなものだったが、それは紙ではなく銅版だった。ガラスに保護されたその古写真は遠い過去の髣髴を通して現れた亡霊のようでもあったが、アデリーヌはそこに映る女性の美しく強い瞳に魅了された。メタル・スペーサーで丸く縁取られた写真はまるで絵画のようでもあった。その女性はアデリーヌと同じ年くらいだろうか、真ん中でしっかりとわけた髪は耳の下で優雅な円を描くように丸くカールしている。整えられた眉の下にある二つの瞳はこちらをしつかりと見据え、その表情からは今まさにこの瞬間を生きている誇りと緊張感さえ感じ取れた。広いレースのついた白い襟が首の下で几帳面な三角形を作り、その中央には楕円のブローチが輝いている。

「祖母の家でこの写真を見つけたとき、僕はたしかに彼女が生きていたことを信じられ

たんだ。僕は何の宗教も持っていない。けど写真だけは信じていることができる」

ガストンはアデリーヌの手の中で開かれた写真を見つめながらそう言った。

「だから写真家を目指したのね」

ガストンの瞳に宿る真剣さにアデリーヌは心を打たれた。ここにいる男は今世界中に存在する人間たちの肉体を、その存在という奇跡を写し取るものとして思っているのだと思った。絵をやめてしまったアデリーヌには今情熱を捧げるものなど何一つ見つからなかった。しかしアデリーヌが絵を描けなくなったのは、情熱が失われたからではなかった。

自分が見るべきものから目をそらすようになってしまったせいだった。アデリーヌは再びアパルトマンの戸棚の中に眠っている絵の工具箱を思い浮かべた。それはいつでも取り出すことができるのだ。アデリーヌはしばらくの間、ガストンが肌身離さず持っているその写真を見つめていた。それからその写真を閉じてガストンに返すと、ガストンの髪を触り、そして頬に手をやって静かなキスをした。

暖かな色合いの間接照明の下で、二人はワインを飲んだ。時折、観光船の強い光が小さな窓の中に差し込み、薄暗い室内に大きな影を作り出した。赤ワインを飲みながら、ガストンは仕事で使っている一眼レフカメラの使い方をアデリーヌに教えた。アデリーヌはいつかガストンの写真を撮ってみたいと思った。そして、それをモチーフにしてガストンの絵を描くのだ。そんな未来がやってくることをアデリーヌは信じていた。

写真展示の最終日がやってきた。その日はギャラリー・セルパン・オ・パラディでフィニサージュ(クロージングパーティー)が行われた。アデリーヌはオーレリーとベルナルを呼んだ。フィニサージュは十八時からだった。オーレリーはアレクサンドルとセリーヌを連れてやってきてくれた。子供たちはアデリーヌの写った写真を見つめながら、アデリーヌが写ってる！と叫んで喜んでいた。白ワインを飲みながらオーレリーは、あなたは女優になれるわと言った。

「さつき管理人のマダムに会ってね、あなたの写真展を観に行くといったら、目を丸くして驚いていたわよ。あの内気なリンゴ娘がかい？って」

アデリーヌは壊れたラジオのようなマダムの声を想像しておかしくなった。そのとき、アデリーヌを呼ぶ聞きなれない声がした。振り向くと、ギャラリーの入口に二人の女

性が立っていた。画学生時代の友人ジネットとエリーズであった。二人とも、アデリーヌが学校を辞めて以来一度も会っていないかった。二人はたまたま無料のギャラリーガイドに載っていたアデリーヌの写真を見つけて、この会場へやってきたのだった。三人は昔と同じように互いの頬にキスをしあつた。

「驚いたわ、あなたが写真のモデルをしているなんて。学生の頃じゃ想像もできない」
二人ともアデリーヌを感嘆の眼差しで見つめた。アデリーヌは久々に会う友人にどう言つていいか分からず、曖昧な笑みを浮かべた。アデリーヌ自身、この再会を喜んでいいのか分からなかった。実際には喜びより戸惑いのほうが大きく、目の前にいる見覚えのある二人の顔は本当にあの頃友人だった人間と同一人物なのか自信が持てなかった。そして、あのときの自分と今の自分さえも、果たして同一人物なのか確信を持つことさえできなかつた。心の準備もないまま、三人はぎこちない笑顔の中で近況を話し合つた。ジネットはモンパルナスにあるギャラリーでアシスタントをしていた。エリーズは

メルモンタンの先進的なカフェでアルバイトをしながら絵を描いていた。壁に絵を描かせてくれるカフェを探しているという。

「今メルモンタンは流行最先端のカフェが次々とできてるの」

興奮した様子でエリーズは言った。以前まではバステイーユが流行のエリアだったが、今はベルヴィルやメルモンタンといった移民街に移っている。街の流行はどんどん東へと移動しているようだった。そして、すでに会わなくなっていた同級生たちにも人生という変化が続いていたことにアデリーヌは今さらながら気づいた。しかしそれは遠くにある川を眺めるかのように、自分とはとても遠い場所にあった。一体この川はどこから分かれてしまったのだろう。

「高校時代のロシアかぶれ、いたじゃない」

不意にジネットが話題を変えた。ジネットとは高校も一緒だった。

「フアビアンよ」

久し振りに聞いたその名前は、まるで初めて聞いた見知らぬ土地の名のようでもあった。ずっと胸の内に閉じ込めていた名前が他人の口からいとも簡単に出てきたことに驚いた。アデリーヌとの約束を破ったあの青年の顔が頭に浮かんだ。柔らかな黒髪を額に垂らした美しい青年。

「あいつ、今年死んだのよ。イタリアにバカンスへ行く途中に車の事故で」

アデリーヌは脳天を突かれたかのように目を瞬いた。しかしあの青年の優しい笑顔以外、アデリーヌの頭にはもう何も浮かばなかった。次に浮かんだのは、どこかの大地を走る赤い車だった。景色はモノクロなのに、車だけが赤かった。その映像が無声映画のように音もなく永遠に繰り返される。悲しみも喜びもなく、ただ映像だけが流れていた。

「そう、残念ね」

アデリーヌはそう言って口を閉ざした。二人はしばらくサンドイッチをつまみながら写

真を見た後、帰っていった。

ベルナールは開始から一時間後に到着した。しかし一人ではなかった。ベルナールと一緒にやって来たのは小さな黒いバグ犬だった。バグ犬は赤い下をくると上向きにさせながら、老人と一緒にギャラリーの中へ入ってきた。アデリー又は手を口に当てたまま一人と一匹の招待客を迎えた。

「その犬、どうしたの？」

「やはりパートナーが欲しくなつてな、最近飼い始めたんだよ。毎日散歩をせがまれて運動にもなるし、一石二鳥だな」

そう言つてベルナールは何百もの皺を中央に寄せてにんまりとした。アデリー又はバグ犬の頭をそつと撫でた。バグ犬は細い尻尾をプロペラのように回しながら落ち着かない様子で辺りを見回していた。老人が背中をなでてやると、犬は嬉しそうに身を震わせた。ベルナールがマレ地区のバーでシヤム猫を撫でた手を思い出した。やはりこの老人の

手には動物を落ち着かせる魔法が宿っているのだと思った。

「ギャラリーなんて、何十年ぶりだろう。しかし写真を見る目は確かだ。パリ市庁舎で行われたロベール・ドアノー展の警備を担当したことがあるからな」

そう言つてベルナールはアデリーヌに向かつて驚くほど素早いウイंकをした。アデリーヌはガストンを紹介し、ベルナールとガストンは握手をした。こんな光景を見ることになるとは、数ヶ月前までは夢にも思わなかった。自分がある有機的な存在としてパリにいる。今まで自分を拒み続けてきた石の街は、ようやくアデリーヌを認め、彼女の居場所を用意してくれたのかもしれない。すでに会場はアデリーヌの知らない多くの人で溢れていた。イザベルの知り合いだろうか。こざっぱりとしたジャケットを着た左岸の知識人らしき人間が多かった。皆が写真の中に焼き付けられたアデリーヌの裸の眼差しを眺めていた。不意に動悸が激しくなり、水の中にいるように呼吸が苦しくなる。そしていつもの闇が襲ってきた。今ここにいることが信じられなくなり、全ての人間が

光の中で動く幻に見える。近くにゐるガストンまでもが見知らぬ他人に見えた。

パーティーも佳境に近づくと、すでに誰も写真を見てはいなかった。皆ワインを飲みながらサンドイッチやアラブ菓子を食べ、互いの近況報告や現代写真に関する様々な持論を語り合っていた。アシスタントの女性スタッフが空になったワインボトルを奥へと片付けている。アレクサンドルとセリーヌはギャラリーの外の歩道で遊んでおり、オーレリーがその様子を穏やかに見守っていた。アデリーヌのすぐ近くでは、ベルナルがガストンに話しかけていた。イザベルは様々な知識人に囲まれて、経営者らしく笑顔で対応していた。アデリーヌだけがこの展覧会の中心にいながら、蚊帳の外にゐるかのようだった。

パーティーは八時に終わり、ワインを飲んだ客たちは上機嫌で帰っていった。ベルナルは新しいパートナーと一緒にあの馬蹄バーでさらに一杯ひっかけるのだろう。すで

にギャラリーに人はいかなかった。ガストンは外の通りで、夜の帳が落ちたパリの夜景を眺めているようだった。二人でアパルトマンに戻り、実家から送られてきたカルヴァアドスで祝杯をあげようと考えていた。そして、絵をまた描き始めることをガストンに言うのだ。アデリーヌは数日前に戸棚の奥から取り出した絵の具箱を思い浮かべた。長い間閉じられていたその木箱を開けると、油絵の具の発する濃密で重い匂いがアデリーヌの目と鼻を刺激した。中にはあのとときのまま詰め込まれた絵の具と絵筆、亜麻仁油やテレピン油のビン、そして宇宙の星雲のように混ざり合う絵の具がこびりついた折りたたみ式のパレットがあった。まるで昨日の続きをこれから始めるみたいに、それらはあのとときのままであった。しかしそれは、初めて見る映画のようなある始まりを予感させた。そしてアデリーヌは薄暗いアパルトマンの中で、ようやく確かな何かを見つけた気がした。

ギャラリーの室内は先ほどまで人がいたとは信じられないほど静まりかえっていた。

プラスチックのコップやサンドイッチ、サーモンクリームに乗ったクラッカーが中央の白いテーブルの上で沈黙の空気を吸収していた。先ほどまでの華やかな人々の話し声はスクリーンの向こうに消え、今はただ映画とは関係のない自分の影だけが上映後の映画館に残っているかのようにだった。不意にアデリー又はその場にいることに耐えられなくなり、ガストンのいる外へ出ようとした。そのとき、奥のスタッフルームからイザベルが戻ってきた。二人は改めて挨拶し、唇を湾曲させて互いの好意を確認しあった。今日はありがとう。アデリー又はそう言つて微笑んだ。イザベルは笑みを残したまま沈黙していた。

「あれ以来ここに来なかったわね、どうして？」

そう言つてイザベルはアデリー又はの瞳を覗き込んだ。考えてみれば、ここへ来るのはまだ二回目だったことに気づき、アデリー又ははなんと言つていいか分からずに下を向いた。

「自分を見るのが怖かったの？」

ギヤラリーが急速に縮まっていくように思えた。床がせり上がり、イザベルの顔が歪んでいく。そんなことはないと言いたかった。しかし、本当にそうなのかアデリーヌには自信がなかった。

「あなたはまだ自分の存在に不安を感じているのね」

アデリーヌの答を待たずに、イザベルは展示写真を一枚一枚見ていった。

「あなたの人生なのよ、自信を持ちなさい。それに、欲望は恥ずかしいことじゃないわ。それがなければ人間はとつくに滅亡しているわよ」

アデリーヌはまるでギヤラリーの一部になってしまったかのようにその場から動けず、ただイザベルが壁に掛けられた写真を見ながらゆっくりと歩くのを眺めていた。

「この写真は売約済み、買った人はきつとあなたの欲望を買ったのよ。あなたの目線、あなたの欲望、あなたの人生を構成する本人さえ気づかない一瞬」

そう言いながらイザベルが写真を見るたびに、アデリーヌは自分自身が裸にされる感

覺を味わい、再び呼吸困難に陥った。その皮膚の奥にある欲望や不安や嫉妬までもが暴かれ、自分自身の中に閉ざされ守られていた弱みの全てが皮膚から染み出て身体全体を濡らしていくかのようにだった。まるで高校時代にフアビアンに感じていた欲望さえ悟られたかのように。

「私は自分が美しいことを知っている。パリで多くの男たちの欲望の視線を受けて生きてきたから。美しいこと自体が私の存在意義だった」

イザベルの背中が止まった。イザベルは誰に話しているのだろうか。私だろうか、それとも自分自身にだろうか。アデリーヌには分からなかった。自分がここにいることさえ、虚構の世界の出来事のように思えた。すでに通りには闇が迫っていた。狭い歩道を人々が下を向きながら歩き、バスや車が徐行しながらセーヌ方面に向かっていった。ガラス越しに外の歩道に立つガストンの後姿が見えた。しかしギャラリー内はそれらとは無関係に進行する別世界かのようにだった。イザベルの声だけがこの世界を支配し、絶対君

主のごとく存在していた。

「私はすでに自分の肉体を発見し、知り尽くしている。まるで自分の創造した天地を眺める神のように」

そのときイザベルが振り返り、正面からアデリーヌを見た。

「でもね、あなたを写したこの写真を見たとき、まだ自分の知らない肉体があることに気がついたので。プルーストが言うとおりね。肉体は永遠に自分の中にあるよそ者なのよ。私のまだ知らない快感をそこに感じたわ。あなたの瞳はまるで初めて人間を見た天使そのもの。そしてそれを写し取るガストンの視線も。私から見ればあなたたちは天使のように純粹よ。正直言つて嫉妬した。だから私、ガストンを誘惑したのよ。アナーキーでお金がなく、それゆえに無垢で自由な青年。写真家になるために生まれてきたような男。今までの恋人は皆芸術家だった。フランス人、ドイツ人、中国人。私はいつも彼らのモデルになったわ。夜のセーヌ河の石畳で寝転んだり、夕暮れに映える橋の上で遠

くを見つめた。裸にもなったわ。ファインダー越しに見つめられる快感、自分の色がカ
ンバスに塗られる瞬間の喜び、そのたびに新しい肉体を発見していった。私は美の表現
そのものだった。でもガストンの写真を見たときの興奮は今までにないものだった。あな
たにはまだ分からないわ。これまで出会った写真家の表現が凝った作り物に見えてし
まうくらい、そこには純粹な存在があった。私はすぐ自分のギャラリーで扱うことにし
た」

沈黙が十五秒ほど続いた。そのときアデリーヌは一体何を見ていたのか、彼女自身にも
分からなかった。自分の足が床から生える木の幹のように感じられ、そこから離れ
ることができなかった。

「この前の土曜日、ガストンと寝たのよ。私のアパルトマンに夕食に招待したの。彼は私
の家で白ワインを飲み、洋ナシのタルトを食べた」

そのときアデリーヌの頭に浮かんだのは、暖炉の上に置かれた静物画のモチーフのよ

うな洋梨だった。洋梨が徐々にクローズアップし、表面の黒い染みが広がり始めた。そしてそれはあつという間にアデリーヌの全身を覆った。アデリーヌは再び自分の周りに透明な闇が襲ってくるのを感じた。川の上流から急激に霧が押し寄せてくるように、それはあつという間にアデリーヌの全身を包み込み、視界を奪った。アパルトマンからいなくなったはずの黒い怪物が、再びゆっくりと頭をもたげるのをアデリーヌはたしかに感じた。ここは一体どこなのだろう。必死で立ちながら、立っている理由すら分からなくなつた。ギャラリーの外では以前と同じようにパリが動いているはずだった。ガラス越しに見えるガストンの背中はいつもと同じように細く丸みを帯びていた。しかしそれはすでに親密な肉体ではなく、何か得体の知れないものに見えた。今まで自分はガストンと一緒に時を過ごしていたのだろうか。そもそもガストンとは誰なのだろう。アデリーヌはギャラリーの外に出ると、賑やかなビュシ通りに向かって走り出した。後ろから男の声が聞こえた気がしたが、それはバスや車の騒音に紛れてすぐに消えていった。

どこに行くあてもなかった。ビュシ通りを抜け観光客の多いサン・タンドレ・デ・ザール通りを歩いた。レストランの前では白いエプロンをつけた体格のいい店員が白ワインと一緒に生牡蠣を売っていた。暗い夜道に書店や文具店、小さなブティックが軒を連ねて控えめで暖かな光を放っている。サン・ミッシェル広場の噴水まで来ると、先ほどのサン・ジェルマンの雰囲気とは一転し、観光地としてのパリの賑やかさと開放感が充滿していた。多くの人間が今から始まる夜を恋人や友人たちと過ごそうと噴水の前に集まっていた。大天使聖ミカエルが水を吹くドラゴンの上で剣を振りかざしている。広場の向こう、サン・ミッシェル大通り沿いには学生時代にスケッチブックをよく買ったジベール・ジュノー書店が琥珀色に輝いている。アデリーヌは無表情のまま広場を早足で通り抜け、サン・ミッシェル橋を渡ってシテ島へ入った。光のないところへ行きたかった。自分の肉体を消してしまえる場所へ隠れたかった。それだけが自分を救える唯一の方法に思えた。こんなとき、信じられる宗教があればどんなに救われるだろうかと思った。しかし

アデリーヌには信仰する神など存在しなかった。ノートルダム寺院の横を通り抜ける途中、日本人らしき女性とすれ違った。黒いコートを着込み、観光客とは異なる厳しい表情をしていた。その顔は美しくもあり青白い能面のようにでもあった。足が疲れていたが、アデリーヌは歩き続けた。

白く光るサン・ルイ橋を渡ってサン・ルイ島へ入った。オレンジ色の光を灯した赤い庇のブラッスリーを抜けると、不意に闇の深度が一段深くなった。以前にガストンと歩いた島の中央にある通りをアデリーヌは一人で入っていった。しかし本当にそうなのだろうか。あの頃の記憶が自分のものなのだろうか、すでに定かではなかった。今歩いている道が過去に通った道なのかどうか定かではなくなり、自分の人生が進んでいるのか後退しているのかさえも見分けがつかなくなった。通りは中世の森のように闇に包まれ、螢火のような街灯だけが通りの奥まで点々と灯っていた。

レピュブリックに戻ったとき、パーティーで別れたオーレリーとぼったり再会した。あれからまだ二時間しか経っていないが、アデリーヌには恐ろしいくらい長い時間が失われてしまったように思えた。オーレリーは共同玄関の前に立っていた。

「助かったわ。暗証番号忘れちゃって」

照れたように微笑みながらオーレリーが両手を軽く上げた。オーレリーが忘れるとは珍しかった。アデリーヌはドアの前にあるインターフォンに5桁の暗証番号を入力した。開錠されたドアを開けて、二人は中へと入った。途端に暗かった玄関の明りが灯り、背後でドアが閉まった。それとともにパリの騒音は遙か遠くへ消え去った。二人きりになったアデリーヌとオーレリーは、同じ建物に住む者同士の親密な笑みを交し合った。

「子供たちは？」

「今日は夫のところ。月に一回だけ泊まりに行かせているの。今送ってきた帰りなのよ」
そう言つてオーレリーは図書館で見せるよりいくぶん柔らかかな表情を浮かべた。しかし

その顔には疲労がたまっていた。巨大イグアナが地階に到着し、アデリーヌとオーレリーを吸い込んだ。

「今日のパーティーは楽しかったわ。ありがとう」

「こっちこそ。来てくれて本当に嬉しかったわ」

巨大イグアナが四階に到着した。鑄鉄のドアを開けたオーレリーは一瞬下を向いてからアデリーヌを見た。

「どう、少しだけ寄ってかない？ リンゴのタルトタタンがあるの。あなたにもらったリンゴで作ってから、最近よく作るようになって」

家に帰ってもどうせ独りだった。

「アヴェック・プレジール（喜んで）」

アデリーヌはそう言って頷いた。

オーレリーのアパルトマンはアデリーヌの一階下であったが、部屋はアデリーヌの部

屋より広がった。美しい玄関の奥に広々としたリビングがあり、黒いテーブルの上にミルクパンとシリアルが置かれていた。普段はアレクサンドルとセリーヌがいるためにあまり気づかなかつたが、子供が不在のときのオーレリーのアパルトマンは驚くほど広く感じられた。それらの広い空間が手持ち無沙汰のまま冷え込み、影を作っているように見えた。

「あなたの恋人は写真家なのね。素敵なお職業だと思うわ」

そう言いながらオーレリーがタルトタタンをリビングに運んできた。先ほど見たガストンの背中と白い壁の前に立つイザベルの姿が目に見えかけた。そしてイザベルとガストンがベッドの上で蛇のように交わる映像が頭の中に現れ、それはすぐに黒いシルエットで塗りつぶされた。アデリーヌは何も答えなかった。オーレリーは話題を変えた。

「ほら見て。子供たちが昼間に食べたんだけど、あと半分以上残ってるの。パイ生地じやなくてブリオッシュで焼いてみたの」

「美味しそうね」

アデリーヌは軽く微笑みながらタルトタタンを見た。その扇形の欠けた部分は子供たちの不在を強く思わせた。二人は向かい合って座り、グラスに空けたヴォルビックを飲んだ。

「でも今日で展覧会が終わりなんて残念ね」

そう言ってオーレリーは再びガストンの撮った写真について話した。アデリーヌは耳を傾けながらも、すでに自分には何もかもが無関係である気がしてならなかった。皆がガストンのことを話している。それなのに自分だけがガストンのことが分からず、誰からも遠いところにいる。皆が写真の中からアデリーヌの肉体を盗み出し、今自分の手元には影しか残されていないのだと思った。アデリーヌは右手にフォークを持っていることを思い出した。タルトタタンを切って口に入れた。急激な空しさが押し寄せてくる中で、その甘みだけが自分の身体の唯一の感覚であるかのように反応した。

「美味しいわ」

アデリー又はやっとの思いでそう言った。それは本心であったが、もう何か耐えられない気がした。頭が混乱していた。フォークを持つことも、何かを喋ることも、全ては遠くの星の出来事のように理解ができなかった。アデリー又はグラスの水に口をつけた。顔を上げたアデリー又は、オーレリーの顔を見て危うく水をこぼすところだった。オーレリーの瞳から涙がこぼれていた。

「どうしたの？」

「ごめんなさい、分からないの」

オーレリーはそう言つて、泣きながら弱々しく微笑んだ。その口元がすぐに歪み、震える顎の上で綺麗な小さな白い歯が見えた。アデリー又はどうしていいか分からずに、ただオーレリーの顔を見つめていた。オーレリーは半分残ったタルトタンに目を落とすようにしていた。オーレリーの瞳から涙が岩から染み入る水のようにゆっくりと流れ落ち、

頬にその軌跡を残していった。一瞬、その涙はアデリーヌ自身の涙ではないかと思った。彼女は自分の代わりに泣いてくれたのではないだろうか。肩を震わしてオーレリーは泣いていた。一步でも動いたらその岩が崩れ落ちてしまいそうな気がした。ポンピドゥー・センターのカウンターに座っているオーレリーはここにはいなかった。ここにいるのは人生の目的を見失った一人の女性だった。アデリーヌにも分からなかった。幸せや愛というものがどこにあるのか。分かっていたのは、失われていたのは自分だけではないということだった。二人はいつ崩れてもおかしくない滝の先端にしがみつく岩であった。

「毎日が無意味に私を奪い去っていく気がして、おかしくなりそう。子供たちのために作ったタルトタタン。でも残った半分を見ていたら、理由もなく悲しくなってきた。そこに空しさを埋め合わせることさえできない自分の人生が凝縮されているような気がして、一人で食べられそうになかったのよ。夫はもう私を愛していない。すでにアパルトマンには新しい女がいるのよ。私と離婚する前から密かに付き合っていた若い馬鹿女。今

頃子供たちは夫のところまでその女と一緒にろくでもない冷凍食品を食べているわ！」
これほどまでに激しい悲しみと憎しみが、オーレリーのどこに隠されていたのだろう。
オーレリーは顔を両手で覆い、肩を震わせた。その姿はとても小さかった。

「大丈夫？」

アデリーヌの問いかけにウイと答え、オーレリーは涙目のままゴロワーズの箱を取り出し、震える指でタバコに火をつけた。一瞬イザベルの姿が脳裏をよぎった。オーレリーがタバコを吸うのを見るのは初めてだった。彼女はタバコを持ったまま、テーブルに肘をつけて窓の外に目をやった。外は暗く何も見えそうになかった。ただダイニングに座る二人の女の顔だけが、闇の中に動かぬ彫刻のように浮かんでいた。煙草の赤い光がパリの闇にぽつんと灯っている。そのとき携帯電話が鳴ったので、アデリーヌは身体を震わせた。フランシスコ・ターレガの大ワルツは、あらゆる赦しを私たちに説いているようでもあった。沈黙の中でヨーロツパ共通のこの着信メロディが三回鳴ってから、アデリーヌは携

携帯電話を取り出した。ガストンからだった。

「一体どうしたんだ？先に帰ったのかい？」

ガストンは携帯電話を持っていない。パリのどこかの電話ボックスの中にいるガストンの姿が浮かんだ。その顔は街灯の光を浴びていやらしく歪み、次の瞬間にはイザベルへと変わった。

「全て聞いたわ」

沈黙があった。アデリーヌは窓の外を見た。向かいのアパルトマンに灯る明かりが水平線に浮かぶ漁火のようにぼんやりと漂っていた。それはアデリーヌの瞳の中で滲み、沈み込んでいった。

「永遠の愛というのは人間が作りだした最悪の言葉よ」

ガストンは何も言わなかった。しばらくしてアデリーヌは電話を切った。アデリーヌの手の中で、携帯電話だけが果てのない深海へと重く沈んでいくようだった。通話口から

聞こえるガストンの声は、とても遠く、初めて聞く他人の声のようでもあった。オーレリーは瞳を丸くしたままアデリーヌを見ていた。

「大丈夫？」

アデリーヌは答えずに、オーレリーの震える瞳を見つめ返した。オーレリーの頬にはまだ涙の跡が残っていた。オーレリーは目を伏せ、眉を寄せながらタバコを苦そうに吸いこんだ。アデリーヌは立ったままテーブルの上の木目を見つめていた。二つの肉体は沈黙の中で、これからどうすればいいのかわからずに、ただその場に存在し続けていた。しばらくしてアデリーヌは暇を告げた。

「ありがとう、タルト美味しかったわ」

オーレリーは微かな笑みを見せた。

「いてくれて、ありがとう」

それから消え入りそうな声で、おやすみと言った。あなたも、また明日。そう言ってア

デリーヌはドアを開けて螺旋階段を上がり、自分のアパートマンへと帰っていった。

パリでの日々は陽炎のように過ぎていった。アデリーヌにとって、ポンピドゥー・センターでの仕事が全てになった。学生たちのために本を整理することは世界の秩序をもたらすことであり、それは意味のある作業だったはずだ。それなのに全てが空しかった。携帯電話の電源は切ったままにしていた。ガストンと連絡をしなくなり、日々は単調に過ぎていった。ただ音のない空虚だけが辺りを支配し、アデリーヌの目にパリは灰色の肩をぐったりと落としているように見えた。アデリーヌは毎日、抜け殻のようになった身体を引き摺るようにして職場へと向かった。ポンピドゥー・センターは相変わらず多くの人を飲み込んで吐き出していた。書物はあるべきところに収納され、そして利用客によって引き出されていた。図書館は秩序正しく作動し続け、全ては清潔で平和であるかのようにだった。しかし仕事が終わり図書館を出ると、そこには混沌とした

夜のパリが広がっており、アデリーヌはその闇と光の中で何をしたらいいのか分からずに立ち尽くすのだった。ポンピドゥー広場にいた大道芸人は姿を消し、何人かの画家たちが路上で販売していた色鮮やかな抽象画を片付け、その横を黒いコートを着こんだ人々の群れが通り過ぎていった。その路上の隅に写真を売るガストンの影を不意に見た気がして、立ち止まったことが何度もあった。琥珀色に浮かび上がった石畳の上を歩き去る無数の黒いシルエットたちはこれからどんな悲しみや喜びの穴へ落ちていくのだろう。人々の笑い声だけがその場に残り、石畳の襞に沈み込んでいく。そして、どこにも行けずその場に立ち尽くしているのは自分だけなのだと思った。

アデリーヌは再びリュクサンブル公園へ行くようになった。セーヌを渡りサン・ジェルマンとオデオンを抜け、日の光が平等に降り注ぐ緑の園に戻っていった。公園で起こる全ては以前にも増してスクリーンの中での出来事のように思えた。アデリーヌは透明な観察者であり、それ以外の何者でもなかった。肉体をどこかに置き忘れたまま、

アデリーヌは他人のようなバリを彷徨った。十九世紀から残る時の止まったような。パサージユの中で古い切手やポストカードを眺めたり、ボン・マルシェ近くの映画専門店でのスチール写真を見たりした。夜の帳が下りてレピュブリックのアパルトマンに帰ると、そこは井戸の底のように冷たかった。そのとき初めて疲れ切った重い肉体が今まで一緒にいたことに気づくのがあった。部屋の隅にいる黒い怪物は、前よりも大きく成長し、今まさにアデリーヌを取って食べようと待ち構えているかのようだった。

イザベルに再会したのはフィニサージユで会ってから二週間後の月曜日だった。仕事を終えて職員専用ゲートを出たところにイザベルが立っていた。何故そこにいたのか分からなかったが、二人は以前と同じように挨拶を交わした。

「携帯に出なかったから。心配していたのよ」

アデリーヌは目の前のルナール通りを無表情に見つめたまま、イザベルの横を通り過

ぎようとした。イザベルがそれを遮った。

「夕食でもどうかしら？ ポンピドゥー広場前のカフェで」

まるでギヤラリーでの会話が嘘であったかのように、イザベルの声は明るかった。不意に暗闇の中に浮かぶ洋梨の黒い染みが頭を強く締め付けた。しかし、それにもかかわらずアデリーヌは、イザベルのあとに黙ってついていった。一人でいることにこれ以上耐えられなかったせいかもしれない。

広場に面したカフェ・カヴァリエ・ブリュ(青い騎兵のカフェ)に行くと、水色の庇の下、暖房用にビニルで外気から遮断されたテラスの中で多くの人が談笑していた。二人が席につくと、ギャルソンがやってきた。アデリーヌはペリエを、イザベルはヒューガルデンを頼んだ。しばらくの間、二人は黙っていた。周りの客たちの話し声だけが暖かなテラスの中で弾んでいた。ギャルソンが飲み物を運んできた。

「この前の発言は後悔しているわ」

そう言つてイザベルは唇の端を少し曲げた。

「気にしていないわ」

アデリーヌは運ばれてきた炭酸水を少し口に含んだ。イザベルはもう一度ギャルソンを呼び、食事の注文をした。イザベルはコールドローストビーフとパンを、アデリーヌは適当にメニューの中からニース風サラダを注文した。食事をしながら、イザベルは自分のギャラリーで新しく展示している写真家の作品について話した。まるでガストンの展示など最初から存在しなかったかのように。その間、アデリーヌはここにカフェが存在し、その中に自分があることの不思議さについてずっと考えていた。サラダを口に運ぶと、そこにはたしかな味があつた。それはオリーブでありアンチョビでありジャガイモであつた。何故世界は依然としてここにあり続けるのか。答はでなかつた。

食後、二人は街を歩いた。外はとても冷え込んでいた。かつて悪臭を放つ共同墓地だつたイノサンの噴水の前には若者たちが座り込み、犬を連れたホームレスが夜の酒盛

りを始めていた。辺りに酒ビンやファーストフードの紙袋が散らばっている。二人はサン・ドニ通りを北に向かった。通りは白い光で溢れていた。ケバブを売る店から肉の匂いが漂い、安価な服や靴を売る若者向けの店からはラップ系の音楽が流れていた。その中をパーカーとジーンズを身に着けたアラブ系の若い男たちが肩を揺らして歩いていく。猥雑なサン・ドニ通りを歩きながらイザベルはゴロワーズを吸っていた。しばらく行くと、ピンクや赤のけばけばしいネオンがきらめき、セックスショップやクラブという文字がアデリーヌの目に飛び込んできた。店の前ではスーツを着た黒人が立ち、その周りを派手な服を着た女たちが楽しそうに話していた。一人の会社員風の男が娼婦らしき女と一緒に靴屋の隣の狭いドアの中に消えていった。

「ここはきつと中世の昔から蝶が飛び交っていたのね」

安っぽいネオンで彩られた夜の中を怪しげな色で飛び交う蝶が見えた気がして、アデリーヌは眩しそうに何度か長い瞬きをした。暗闇と光が交互に視界を支配し、どち

らが本当の世界なのか分からなくなる。

「前世は私、世紀末の高級娼婦だったと思うの」

その言葉に驚いて、アデリーヌはイザベルを見た。

「だって、この通りやロワイヤル通りのレストランの前を通るたびに懐かしい気になるの。

そしてサン・ジェルマン・デ・プレ界限に立つ若い女性たちに苛立ちと親しみを覚える」

イザベルは通りの先を見ていた。すでに何か他のことを考えているようだった。遙か遠くの先、もしくは過ぎ去った過去を見ているのかもしれない。イザベルには今何が見えているのだろうか。アデリーヌからガストンを奪った女。彼女はたしかにここにいる。しかし自分はここに存在しているのだろうか。二人はすでにサン・ドニ通りの北端に来ていた。二十世紀の始めに栄華を極めた大通りが横切り、その向こうにはルイ十四世の戦勝を記念して建てられた巨大なサン・ドニ門が立っていた。

「ここは昔、城壁があつたのよ。七百年以上前、シャルル五世の時代。想像できる？ここ

より向こうはもうパリの外だったなんて」

フランス中世史の教授のような熱心な口調で、イザベルは手を広げてアデリーヌを見た。アデリーヌはかつてのパリを想像しようとした。高い城壁の向こうには関税を免れるために城壁の外で市を広げる農民たちが集まり、賑やかな朝市を形成している。城壁の中では今と変わらぬ娼婦たちが街に立ち、怪しげな蝶の粉を振りまいている。その城壁の間にイザベルが立って微笑んでいた。

「ねえ、想像できる？」

気がつくのと、そこは現在のパリだった。大通りには車が行き交い、その向こうにストラスブル・サン・ドニのメトロが光っている。

「無理よ、そんな昔のこと」

「当たり前よ。神のように天から時を見下ろせないもの。私たちは時の中にいるんだから。時間の中で人間は溺れて消えていく。なんて弱いかしら。この流れていく時間を

どうすることもできない。こんなにたくさんさんの時間が与えられているのに、私たちは使
い方すら分からないのよ。でも分かるの。今も昔も、私にとって信じられるのはここに
ある肉体だけ」

不意にアデリー又は、この不快で猥雑な通りに人間の全てがあるのではないかという
気がした。通りを歩くアフリカ系やアラブ系の男たちの目線、娼婦たちの食欲で疲れ
た瞳。あらゆる瞳が今この瞬間に何かを捉えていた。しかしそれが彼らのものになるこ
とは永遠にないのだろう。全ての眼差しは空しくすれ違い、悲しい肉体だけが永遠に
追いつけない愛というものを求め続けるのだった。二人は大通りを渡り、サン・ド二門の
下を通った。

「あなたに聞きたかったことがあるの」

門の下の暗がりでもアデリー又は立ち止まった。昼間は多くいる鳩も夜は皆どこかへ消え
ていた。

「愛というものが存在するのか。あなたはそれをどう考えているのか」

イザベルは黙ったまま短くなったゴロワーズを吸っていた。そして門の脇に煙草を捨てた。

「愛なんてものは存在しないのよ。欲望に従って美と肉体を愛でるだけ。そのときに生まれるエゴが愛と勘違いされているだけ」

気がつくときアデリーヌはイザベルに手をとられてタクシーに乗っていた。タクシーは暗闇の中を永遠に終わりの来ない夜の先に向かって走っていた。タクシーは沈黙の殻に包まれてどこかへ逃げようとしているようにさえ思えた。窓から見える光景はゴダールのSF映画に出てくるモノクロのワンシーンを思わせ、すでに自分はどこか近未来の感情の失われた世界にいるのだと思った。あの誘惑と欲望の入り組んだ現実世界から逃げられるならどこへでも行こうと思った。タクシーがポン・ヌフを渡った。二人の乗ったタクシーがポン・ヌフの上を走っていることが信じられなかった。このタクシーはあの日の過

去へと遡っていくことができるのかもしれない。

タクシーは路地を何度か曲がり、しばらくして小さな通りの途中に停まった。そこはおそらくパリのどこかだった。

「ハイ、よ」

大きなドアが目の前に聳えていた。アデリーヌが住む建物のドアの二倍はあった。イザベルの手に引かれるままに、アデリーヌは中へと入っていった。広い中庭を抜けて共同玄関に入り、大きなエレベーターに乗り込んだ。イザベルはアデリーヌを見つめた。自分より年上の美しい女の瞳がアデリーヌの虚ろな心の中に入り込み、その宇宙を掻き乱した。エレベーターが開くと、目の前に赤い木製のドアがあった。イザベルはコートのポケットから鍵を取り出すと、そのドアを開けてアデリーヌを中へと招き入れた。そこはサン・ジェルマンにあるイザベルの高級アパルトマンだった。赤いカーペットの引かれたリビングは広く、ガラス張りのテーブルの上に美術館のカタログが山積みになっていた。近くの

床には大量のワインとブランデーが置かれ、壁には高価そうな絵画やモノクロ写真が掛けられている。

「ニューヨークでギャラリーをしている友人からワインが入ったのよ。二人だけでも一度写真展のお祝いをしましょう」

イザベルはアデリーヌにソファを勧めた。アデリーヌは倒れこむようにそのソファに沈み込んだ。疲れがたまっていた。上等な赤ワインを飲みながら、二人は最近オルセー美術館で行われた「マティスからピカソ展」のカタログを見た。この絵は好き、この絵は苦手。そう言いながらページをゆつくりと捲っていた。マティスの鮮やかで平面的な色彩を見ているうちに、滑らかなイザベルの手がアデリーヌの肩を撫でた。イザベルの手が肩を伝って右腕の皮膚をつかんだ。その手が蜜となってアデリーヌの腕に流れ出し、身体全体が琥珀色の液体で覆われていくような気がした。不快さは感じず、それは甘美でさえあった。その肉欲はもともと自分の中にもあり、琥珀色の蜜は自分の中から流れ

出てきたものなのかもしれないと思った。次第に現実の風景は曖昧になり、マティスの絵が空中に広がり始めたように見えた。絵の中でくつろぐ女たちの色彩がイザベルのアパルトマンに流れ、自分が絵の一部、無数の原色でできた歓喜や退廃そのものに変化したような虚ろな気分を味わった。ガストンも自分の中から出てくる蜜の源泉をここで見たのだろうか。イザベルの手がアデリーヌの黒髪を撫で、それを琥珀色に変えていく。アダムとイヴの時代から、人間は何も変わっていないわ。イザベルの唇が愛と美の女神アプロディーテーのようにゆつくりと動いた。ただ野原を石の建物で埋め尽くして知識で自分たちを武装しただけ。もし人類が滅びて最後に二人だけになっても、アダムとイヴと同じことをするに決まっている。イザベルは翡翠色の眼差しでアデリーヌを射抜いた。アデリーヌは目を閉じた。体内にワインが溶けていく。パリ中の建物が一瞬にして消え、下から現れたガリア時代より遙か昔、神々のいた野原にアデリーヌは寝転んでいた。視界には青々とした麦が日の光を受けて輝くのが見える。自分の肉体

で押しつぶされた若く芳醇な麦の香りが背中から頬を伝って鼻腔へと漂ってきた。原始の野原にいるのはイザベルとアデリーヌだけだった。その青々とした麦の生える野原で、二人は裸で楽園を這い回る蛇のように肉体と肉体を重ね合わせていた。

「私はガストンの欲望をもっと引き出したいの。そしてあなたの透明な香り、無垢な美しさを……」

イザベルの唇から言葉が洩れ、アデリーヌは目を見開いた。アデリーヌは不意に溺れていた蜜の沼の中で息苦しさと不快感を覚えた。もつれた二人の身体を強引に引き離し、倒れるように床に下りると、イザベルから逃れて玄関に走った。ワイングラスが床に落ちる音が聞こえた。

「空虚なのよ！」

背後でイザベルが叫んだ。ドアを開けながらイザベルの言葉が背中に突き刺さってくる。

「パリで自分だけが取り残されていくのよ。ガストンは写真を撮ってくれなかった。私は三十七。あなたと違って肉体はもう若くない。時間は何かを与えてくれるのではなく、全てを奪っていく。罪を背負ってもパリを追放されても、私は肉体を求めることしかできない。ハルピユアのように、醜く！」

ドアの鍵を開けるのにとまどっていたため、イザベルの言葉が全て聞こえた。滑稽であり悲しかった。アデリーヌの頭に、ギリシア神話の妖鳥ハルピユアの姿が浮かんだ。それは深い孤独な森の中で一人きりで泣く、上半身が女で身体が鳥の奇怪な生き物だった。エレベーターに入った途端、全ての物音はかき消された。

イザベルと別れたあと、アデリーヌはパリの街を彷徨った。いつまでこんなことを続けるのだろうか。死ぬまで闇の中を来るはずのない光を求めて彷徨し続けなければならぬのだろうか。自分自身が空の器のように思えた。その器に何が入っていたのか、思い

出すことはできなかった。今抱えている自分の悲しみや不安も、パリの美しさには何の関係もないのだと思った。

気がつくときアデリー又はアパルトマンの中にいた。小さく言葉にならない呻き声を呟きながら、アパルトマンの中を意味もなく歩き回っていた。吐いた言葉は自分に返り、全ての恐怖は不快な欲望に変わった。急に寝室の本棚に置いてある小説が意味のないものに思えた。以前戸棚から出した絵の具箱から油絵の具の微かな匂いが漂ってきた。ガストンを描こうとして出した絵の具箱だった。しかし結局、ガストンの写真を撮ることとはなかった。久し振りに携帯電話の電源を入れると、息を吹き返した古代生物の瞳のようにディスプレイ画面が闇の中に浮かび上がった。寝室から台所を通り抜けて浴室へ行き、そしてまた寝室に戻った。台所を横切ったとき、アデリーの鼻腔に仄かな酸味を感じられた。リングだった。マツの木箱の中にあつたリングをつかむと、それを床に投げ捨てた。リングは鈍い音を立てて白い床を転がり、サイコロのように緩やかな

旋回運動をしてから止まった。アデリーヌは箱からリングを取り出しては投げた。そのたびにリングは鈍い音を立てて転がった。冷蔵庫は無機的な唸りを上げていた。台所の床に転がったいくつものリングたちは、音もなく密やかな沈黙を宿していた。全てがそこに確かに存在していることを見たアデリーヌは、全身にひどい疲労を感じた。そのとき携帯電話が鳴った。アデリーヌは出なかった。電話は鳴り続けていた。スペインの作曲家による心地よい音色は、アデリーヌのいる孤独な部屋のどこかに吸収され続けていた。アデリーヌは起き上がって寝室へ行き、ベッドの上にあつた携帯電話をつかんだ。画面表示を見ると、オーレリーからだった。

「大丈夫？天井で鈍い音がしたけど」

アデリーヌは真下のアパルトマンで天井を見上げるオーレリーを想像した。ありがとう、もう大丈夫だから、心配しないで。そう言っただけでアデリーヌは電話を切った。そして台所に戻って床に落ちたリングを一つつかむと、膝を抱えながら思い切り齧った。音のない

アパルトマンの中で、その音は今ここにいる無力な自分自身を強く意識させた。オーレリーも今この床の下で、たった一人でこの孤独な世界に耐えているのかもしれない。上からは時折苦しそうな咳が聞こえた。真上のベルナルも独りきりの夜をもう何百回過ごしたのだろう。今はあのパグ犬がその心を癒してくれていることを願った。彼らだけではなかった。耐え切れないほどの夜が今このパリ中に充満し、来るか分からない明日の光を夢見ている。そしてそれをつなぎとめる愛というものすら、すでにこの世界から失われようとしているのだった。アデリー又はもう一度リングを齧った。そのときアデリー又は自分が空腹であることに気づいた。今夜はニース風サラダしか食べていなかった。これだけが今信じられる感覚だった。母親が送ってくれたリングの味だけが何も変わっていなかった。アデリー又は声を出さずに涙を流した。

それからどれくらいの間が経ったのだろう。不意にドアをたたく音がした。アデリー又は家のドアがノックされるのは久し振りのことだった。ついに悪魔が私の犯罪を告

発しにやってきたのだ。アデリーヌは寢室に籠ったまま開けようとはしなかった。その音はしばらくの間続いていた。二回、しばらくしてまた二回。野太い声で私の罪を叫びながら。私はこのパリの園からついに追放されるのかもしれない。アデリーヌは布団に包まり、リングを両手でしっかりと握り締めていた。しかし分かっていて、その音は自分をスクリーンの向こうにある本当の人生へと連れ出してくれるものであることを。それなのにアデリーヌはどうしてもドアを開けに行くことができなかった。アデリーヌは再び自分の世界に閉じこもった。その世界を開けようとする音はしばらくすると止み、いつもの静寂が戻ってきた。あのとときと同じように、世界はまた閉じられた。

そして、長い夜がやってきた。

いつものように朝がやってきた。夢から覚めたときアデリーヌは、自分がここにいることに戸惑いを感じた。夢の中で自分はどこに旅立っていたのだろうか。分からない。しかし、今日覚めた寝室以外の場所ならどこでもいいと思った。時計を見ると、まだ四時だった。布団を被って身体を丸くしながら、パリの街から色が抜け落ち全てのアパルトマンが海の底へ沈んでいく様を思い描いた。火曜日だった。ポンピドゥー・センターの定休日で、アデリーヌは休みだった。しかし、すでに何もすることは残されていないかった。アパルトマンは井戸の底のように冷え込んでいた。今日こそ、世界の終わりだった。ガストンと一緒に朝食のクロワッサンを食べることもなければ、一緒にヴェルニサージュへ行くこともない。ただ、以前と同じ生活に戻っただけだった。あのときからずっと世界の終わりは近づいていたのだろう。アデリーヌはすでに自分が死んでいるのではないかと

思い、冷たくなった右手を動かして自分の髪を触ってみた。墨のように黒い巻き毛が微かな音をたてた。次に頬を触り、乾燥しきった鼻筋に触れてみた。まだ生きていた。昨日と同じ自分であった。それなのに、今度こそもう生きられないのだと思った。

寝室を出て台所へ向かった。リングは昨日と同じまま、床の端々に落ちていた。アデリーヌはお湯を沸かし、紅茶を飲んだ。熱い塊が口の中に包まれ、喉を通り身体に染み渡った。それはまるで生命そのもので、それを飲み込むアデリーヌの身体は液体を染み込ませるだけの不毛な綿のようであった。アデリーヌは台所に座ったまま、ただカップの重みだけを感じていた。そのカップはまだ紅茶の温かさを保持しており、それをつかむ自分の指は驚くほど冷たかった。アデリーヌは昨夜のノックの音を思い出ししていた。あの音は本当にこの世界で起きた出来事だったのだろうか。アデリーヌは紅茶を飲み終えると、訝るようにそっとアパルトマンのドアを開けてみた。そこにはもちろん、もう誰もいなかった。白いぼんやりとした光の中に、いつものように螺旋階段と巨大イ

グアナが見えた。しかしドアの前の床に何かが置かれているのに気づいた。それは一冊の本のようだった。白い布製の表紙には「パリの天使」と書かれている。中を開くと、表紙の裏に一枚の紙が挟まっていた。ノートを切り離れたようなその紙には見覚えがあった。あの真夜中のベンチに挟まっていたのと同じ紙だった。アデリー又はその紙に書かれた文字を読んだ。

へ過ちは消えない。時間はきつと前には戻らないし、僕はただ曖昧な闇の中を先へと歩き続けるしかない。それでも同じところへ戻ってきてしまった僕を許してほしい。あの頃、君のアパルトマンに向かう前にいつも、君がいる五階の部屋の窓をしばらくの間眺めていた。それが僕にとって初めて訪れた幸せだった。四角い窓に浮かぶ黄色い明りが、ようやく見つけた確かなもののように見えた。今日ここへ来たとき、窓に明りは見えなかった。でも君が中にいることは分かっていた。この孤独な世界の中で君がそこにいること

を知っているのは僕だけなんだ。君と一緒にパリの明りの一つになりたい。それが僕の願いだ」

アデリー又は何度も何度もその手紙を読み返した。そして頬を伝う涙を拭いながら、ようやくその本を開いた。一ページ目に題字があり、次に序文があり、そしてドファイー又広場の全景を写したモノクロ写真が現れた。あるときギャラリーの窓に飾られていた写真だった。それは写真集の試作版だった。閉じられたアパルトマンのドアの向こうに、彼はいたのだった。

夜明け前のパリをアデリー又は息を切らして駆けた。空気は鋭利なナイフのように冷え込んでいた。パリ全体が深海の底のように静まりかえっている。動くものは何もない。あのとときと同じだった。真夜中にガストンを探しにドファイー又広場へ行ったときと。

パリは永遠に人通りの絶えた廃墟だった。街灯だけが幕の閉じた舞台のように、夜の終わりを名残惜しむかのような淡い光を地面に落としていた。気がつくときセーヌ河の前にいた。身体が粉々に壊れそうなほど、鼓動が強く波打っていた。ノートルダム寺院の聳えるシテ島を抜けてドウブル橋を渡ると、アデリーヌは息を整えながらモンテペロ河岸に降りた。漆黒のセーヌ河に浮かんだ船宿は世界の果てを思わせた。アデリーヌの鼓動に合わせるかのように船の影が一定の間隔を置いて揺れていた。この前来たときの記憶を頼りに、アデリーヌは闇に沈んだ船の一つに入ってしまった。光のない船内は狭く、床がぎしぎしと鳴り、写真で見た昔の洗濯船を思い出させた。そのとき水面の揺らめきが床からせり上がってアデリーヌの全身を持ち上げ、アデリーヌは壁に手をついて一度目を閉じた。数時間前にイザベルのアパルトマンで飲んだワインのせいで頭が少し重かった。体中の血液が熱く燃え、その中にセーヌの黒い水が上昇して一つとなるような感覚を覚えた。しばらくして目を開けると、廊下の先の部屋に黄色い薄明か

りが見えた。近づくと、ドアは開いていた。部屋には誰もいなかった。しかし先ほどまで誰かがいた微かな温もりが感じられた。ほぼ正方形の狭い部屋の中にはこの前来たときと同じように小さなベッドしかなかった。しかし壁にはモノクロの写真が隙間なく掛けられていた。それは全てアデリーヌの写真だった。そこにはこの前までイザベルのギャラリーに展示されていた写真もあった。狭い室内に置かれたそれらの写真は、全てガストンの孤独な独白となってアデリーヌの内部に直接入り込んできた。アデリーヌは先ほど読んだ写真集の序文の一節を思い出した。

「私は撮り続ける。人間に嫉妬する天使の視線で。天使は望んだ。人間になることを。透明な存在ではなく、肉体のある誰かを愛し愛されることを。私にとって写真とは、そんな美しい世界を願う自分自身の欲望なのかもしれない」

狭い部屋の壁に貼られた写真の中から、幾多のガストンがアデリーヌを見つめていた。自分がここにいることをガストンが証明してくれた。そしてアデリーヌは、この写真の中

に焼き付けられた自分が、あのとき何を欲していたかをようやく理解した。

アデリー又は船宿を出た。対岸のノートルダム寺院は闇の中で眠りについていた。水面間近から見上げるノートルダムの姿は、翼を休めて眠りにつく灰色の火竜のようでもあった。ガストンはどこへ行ったのだろうか。知り合いか友人のところだろうか。そもそもパリに友人はいたのだろうか。ドゥブル橋の袂にある階段を上がつて通りへ出た。ルネⅡヴィヴィアーニ公園の黒い茂みの奥にサンⅡジュリアンⅡルⅡポール教会の三角の屋根が見える。中世の森のようなパリの闇の中をガストンはどこへ行ったのだろうか。不意にベルナールの声が聞こえた気がした。アデリー又はまだ暗い河岸を目的地へ向かつて歩き始めた。

暗闇が薄まり、夜明け前の空は藍色へと変化していた。薄闇に沈むボン・ヌフは何も変わっていないかった。いつも不安を抱えながら歩いてきたあの頃のように、アデリー又は

石橋の上を慎重に歩いていった。右岸の向こうから歩いてくる昔の自分の姿が見えたような気がした。しばらくすると、アデリーヌの視界にドフィーヌ広場への入り口が見えてきた。初めてここへ入ったときの記憶が蘇る。アデリーヌの人生に変化を与えた数ヶ月間の出来事は、全てここから始まったのだ。アデリーヌは広場へと続く小路に足を踏み入れた。

そこには誰もいなかった。まるでここで起きた全てのことは夢であったかのように。期待はしていなかったが、アデリーヌは不安げな瞳を震わせながら広場を見渡した。それから広場に面したカフェに入った。早朝のカフェに客はいなかった。二階の席に上がり、カフェ・クレームを頼んだ。カップに浮かんだ白い泡を飲みながら、窓越しにドフィーヌ広場を見た。人気の無い小さな広場は何も生み出さない不毛の大地を連想させた。ここで本当にあの出来事が起こったのだろうか。広場は何も答えず、ただ沈黙の中で静止していた。

どのくらいそのカフェにいたのだろうか。広場に一人の男がやってきた。男は疲れ果てて、今にも倒れるかのように見えた。何か致命的な欠陥を背負った動物のようでもあった。冷え切ったカップを持ちながら、アデリーヌはその男から目が離せなかった。アデリーヌは不恰好で酸味の強い腐ることしかできないリンゴのことを考えた。気がつく。アデリーヌはバッグの中のリンゴに触れていた。そして五本の指先に力を込めると、男を見つめたまま潰さんばかりにそのリンゴを握りしめた。アデリーヌはそのとき、リンゴを通して世界を感じる事ができた。世界中の人間が今この瞬間、愛を求め悲しみ、そして数億の一瞥を目の前の奇跡に投げかけている。たとえ今理不尽に命を奪われようとも、この眼差しだけは誰にも奪われない唯一のものであった。アデリーヌは、このとき初めて、あの男の撮った写真の本当の意味を知った気がした。

アデリーヌはガストンの部屋から無断で持ち出した一眼レフカメラを麻のバッグから

取り出し、ガラス越しに広場にいる男にレンズを向けた。カメラのレンズを回し、その四角い画像をズームさせる。男は広場の中央で立ちすくみ、辺りを見回していた。誰かを探しているように見えた。それは恐ろしく静かで美しい光景だった。古代の原風景もしくは神話の中に出てくる狩人のような種々の普遍的な魅力を持っていた。そんな楽園の中に男は一人で立ち尽くしていた。何度楽園を追放されても、男はここへ戻ってくるだろう。複雑になった人類の営みを全て剥ぎ取って、最後に残った裸の肉体が、今日の前にあった。アデリーヌは愛すべき不完全な男の名を小声で呟いた。そして、その男へ向けて静かにシャッターを切った。この瞬間を奪い取るように、何度も何度も。

そのとき男が何かに気づいてこちらを振り向いた。ファインダー越しのアデリーヌと視線が一瞬あったように思えたが、すぐに彼の視線は他の方向に向けられた。男は空を見上げたのだ。初めて会ったあのときのようにまっすぐと。その姿は、まるで今まで背中に隠していた透明な翼をゆつくりと広げて、天空に飛び立つ準備をしているか

のようだった。初めて会ったとき、アデリーヌはその男を天使だと思ったことを思い出した。もしかしたら本当に天使だったのかもしれない。彼はパリに降り立った間だけ一時的に翼を奪われ、それが今また与えられたのだ。男は両手をゆつくりと広げて空を包み込むような仕草をした。そしてジャケットのポケットから何かを取り出した。カフエの窓越しからはよく見えなかったが、それは小さな瓶のようだった。そのときアデリーヌははつきりと見た。男の背後、広場の奥から、まるで銀塩フィルムに焼き付けられた黒い染みのように広がり続けるあの黒い怪物がその男を飲み込もうとしているのを。

「ガストン！」

アデリーヌは叫んだが、ガラスに遮られてその声は届かなかった。ガストンは瓶の蓋を開けると、しばらくの間それを見つめていたが、瓶を口元に当てて一気に逆さまに上げた。

「ノン！ノン！」

アデリーヌは叫んだ。ガストンはしばらくの間空を見上げたまま動かなかった。しかし次の瞬間、ガストンの身体がびくりと痙攣し、手は剥製の動物のように突っ張って瓶が宙を飛んだ。ガストンはそのままゆつくりと広場に倒れた。木が朽ち果てるようにゆつくりと。その光景はサイレント映画のように滑稽でさえあった。アデリーヌは数秒間、カメラを手にしたまま動けなかった。しかしすぐに席を立てて階段を下り、目を丸くしたままこちらを見るギヤルソンの横を通り過ぎてカフェを出た。ガストンは青空を仰いで倒れていた。アデリーヌは走って近づいた。ガストンの目は半分見開いていた。虚ろなガストンの瞳がアデリーヌを微かに捉えた。

「ああ、アデリーヌ」

ガストンは唇を歪めながらそう呟いた。男の口から出たその言葉は数千年前に失われてしまった古代言語のようでもあり、自分に発せられたことが信じられなかった。

「ガストン！」

アデリーヌは叫んだ。夜の名残を保持した明け方の空のような脆い美しさは、初めて出会ったあのときと変わっていない。アデリーヌは躊躇うことなくガストンの細い身体を抱きしめた。

「愛しているわ」

アデリーヌは初めてその言葉を口にした。それは心の底から出た真の言葉であり、今まで知らなかった、そして今気づいた尊い感情だった。ガストンからの答えはなかった。アデリーヌはガストンがこのまま天界へ戻ってしまうのではないかと思い、さらに強く抱きしめた。アデリーヌの涙がガストンの首筋にこぼれ落ちた。ガストンは何も感じていないようだった。アデリーヌは麻のバッグからリンゴを取り出し、ガストンの口元へ持っていた。

「さあ、食べて」

しかし、もはやガストンの口は動かなかった。彼の目は空の先の無さえ見えていなかった。ここがパリであることも自分が誰を愛していたかさえ、その瞬間には忘れているかのようだった。アデリーヌの手からリングゴがこぼれ落ち、音もなく地面に転がった。リングゴは落下する。全ては必ず地面に落ちる。それはまるでガストンの願いそのものようでもあった。アデリーヌはそのとき初めてリングゴの真実を理解した。母の声が聞こえた気がした。リングゴは全てを許して美味しさを届けてくれる。しかし、すでに全てが遅かった。「今病院に連れていくわ」

アデリーヌは泣き叫びながら、ガストンの両肩をつかんだ。アデリーヌはガストンを背中に担ぎ、広場を歩いてポン・ヌフのほうへと向かった。ガストンの身体の重みが、今アデリーヌの感じられる全てだった。しかしその重みは徐々に失われつつあるように思えた。このまま空に浮かんでいってしまいそうなガストンを背中にしっかりと繋ぎ止めながら、アデリーヌは硬い石畳を踏みしめて歩いた。私は今歩いている。これは人生なのだ。

劇場でもスクリーンの中でもない。広場の先に見える空はすでに美しいまでの藍色に変化していた。パリの夜が明けようとしていた。私はこの男を愛している。今まで何故気づかなかつたのだろうか。アデリーヌは背中中の重みを感じながら一歩一歩前へと進んだ。小路の向こうにはポン・ヌフの通りが見えた。そして、今までいた舞台から降りるようにドフィーヌ広場から出ていった。

広場に暖かな光が差し込み、手の中にあるリンゴがくつきりと浮かび上がった。私はしばらくの間、そのリンゴを見つめていた。赤と黄色が混ざり合った表皮には幾筋もの黒い染みが広がっている。見てみるとそれは鮮やかな絵の具を使った抽象画のようにも思えてくる。それからその秘密を覗くかのように、根元の窪んだ緑色の部分を鼻にゆつくりと近づけた。仄かな香りがした。そして軽く砂を払い、そのリンゴを一口かじった。酸味の強いリンゴだった。そこにどんな物語があるかと、このリンゴをここに運んだ人と、それを食べられなかった人がいるのだと思った。そうでなければここにリンゴが落ちているはずはなかった。そして、何の偶然か私がそれを食べることになった。広場にはまだ私しかいなかった。静まり返ったその広場は誰もいない演劇の舞台を思わせた。それなのに誰かに見られているような気がしてならなかった。私はリンゴを咀嚼しながら、

ここで起った何かをもう一度想像しようとした。しかし何も浮かばなかった。きっと物語は失われてしまったのだと思った。それかもしくは、これから始まるのか。

パリの天使 (2010)

著者 三上 功